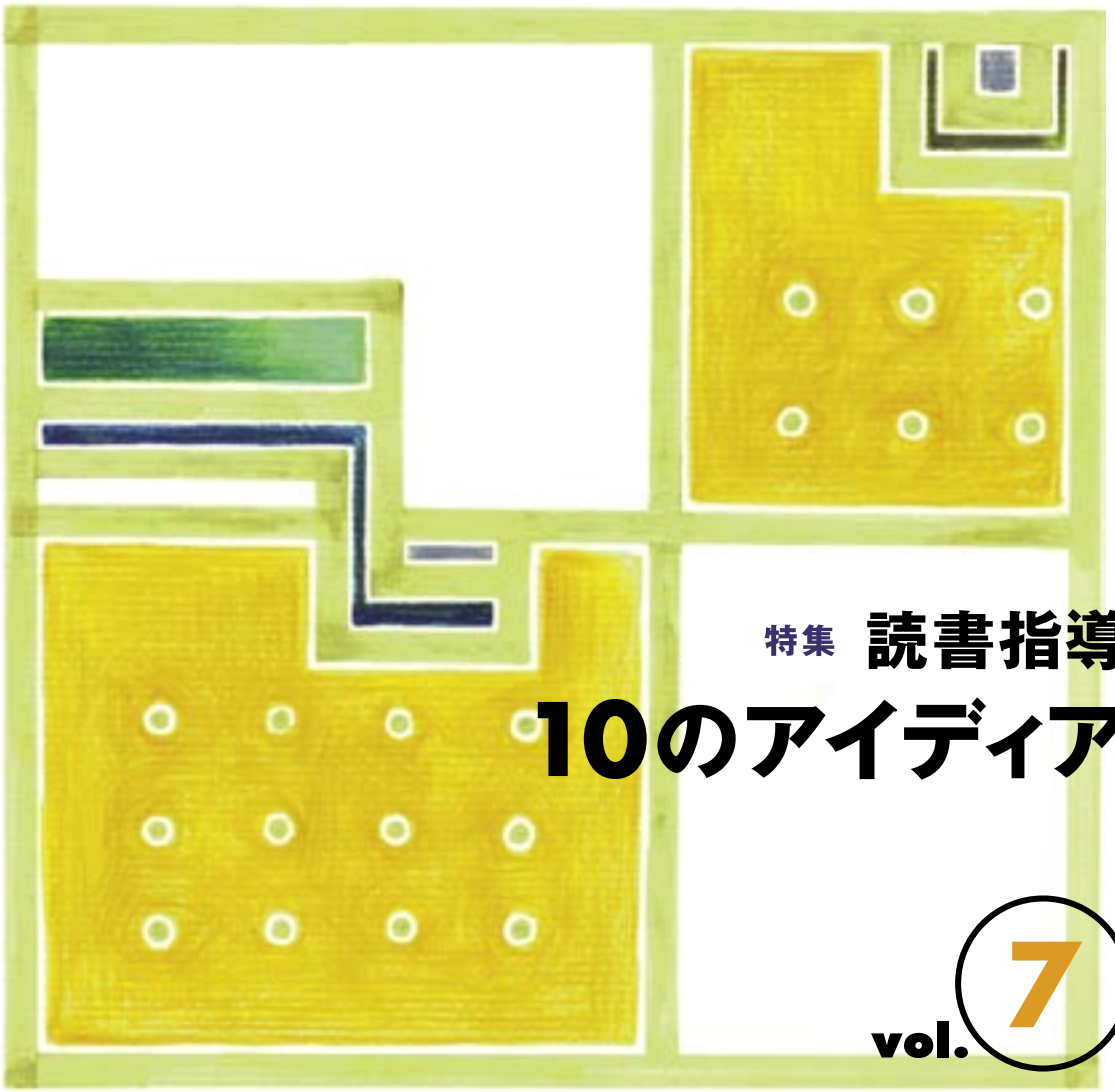
ことばの学び

三省堂　国語教育

a new way of learning Japanese



特集　読書指導

10のアイディア

vol. 7

2004年　夏の国語教育セミナー　続報

前号に引き続き、好評だった「夏の国語教育セミナー」（ILEC言語教育文化研究所・教育文化研究会主催）の様子をご報告します。

第7回 国語教育セミナー〈東京〉

2004年8月20日　三省堂文化会館

A分科会　サブカルチャー学習材の可能性を探る
—「読むこと」と「書くこと」を繋ぐ学びの構想—
町田 守弘

参加者の感想　各グループの先生方から授業案を何通りも提示していただき、交流することによってなによりも得がたい財産を得た気がします。

B分科会　国語科書写の授業をどう組み立てるか
—書写の授業が苦手な先生のために—
松本 仁志

参加者の感想　書写の学習で何にポイントをおいて、児童生徒に指導するのか、教師の構え、そして見方、考え方を具体的な実技を通して教えていただきました。

C分科会　チャレンジ！
メディア・リテラシーの授業開発
中村 敦雄

参加者の感想　メディア・リテラシーの授業と国語科教育との接点を明確にしてもらえた点がとくによかったです。実践にも移しやすく、よい体験となると思います。

D分科会　読書活動ア・ラ・カルト
—ブックトークを中心に—
高桑 弥須子

参加者の感想　ストーリーテリングや読みきかせの実演が素晴らしく、わたしも生徒に向けて語れるようになりたいと思いました。

E分科会　コラボレーション（協働）で書く
牧戸 章

参加者の感想　付箋を使ったり、プロセスを大事にしたり、生徒同士の交流をしたり、と授業の可能性を広げていただきました。

F分科会

ことばのエアロビクス
有働 玲子

参加者の感想　積極的に人と関わることが苦手でも「きっかけ」さえあれば、頑張れるのだと思いました。心がことばに表れるという体験をできたのがよかったです。

文化講演

対話の時代に向けて
平田 オリザさん

第2回 小学校国語教育セミナー

2004年8月21日　三省堂文化会館

A分科会

読書活動ア・ラ・カルト
高桑 弥須子

参加者の感想　みんなの選んできた本のリストをもらえてよかったです。今後の参考になります。

B分科会　「国語教育」と「児童文学」のあいだ
—「読むこと」の授業のためのレッスン—
宮川 健郎

参加者の感想　具体例を通じて、新たな作品解釈の手がかりのヒントを得られた。とても刺激的だった。

C分科会　楽しい群読・話し合い指導の工夫
—子どもが喜び、燃え、力をつける学習—
高橋 俊三

参加者の感想　自己流でやっていた群読でしたが、基本に忠実に、子どもの創造のある学習活動を大切にしたいと思います。

D分科会

句会ライブ
—俳句をつくる・
俳句であそぶ—
夏井 いつき

参加者の感想　先生の楽しくユーモアに富んだ語りと、実際に俳句を作る楽しみと両方があり、とてもよかったです。

E分科会　国語教科書で遊ぼう
堀切 和雅

参加者の感想　エンカウンターやニューカウンセリングなどのエクササイズと国語の学習が一緒になった内容だったのは新鮮でした。

F分科会　聞く、聴く、訊く
—きくことの学びのために—
牧戸 章

参加者の感想　「きく」ということ全体について、新たな視点が得られました。

文化講演　子ども・本・ことば
清水真砂子さん

＊「2005年　夏の国語教育セミナー」については、詳細が決まり次第、ご案内いたします。

ことばの学び

三省堂　国語教育

a new way of learning Japanese

vol.7

CONTENTS

●特集

読書指導10のアイディア

エッセイ　楽しみ方それぞれ　立原 えりか …… 3

実践アイディア　林 容子・五十嵐 ふみ代・丸山 匠勇 …… 4-13

図書館のトリビア・「朝の読書」活動・ブックトーク・読書郵便・アンソロジーづくり・推薦図書ポスター・授業の中の読書指導・図書委員会活動・ブックリスト・ボランティアの導入

論考　「学習センター」「情報センター」としての学校図書館づくり　藤田 利江 …… 14

●特別寄稿

漢字学習の新しい枠組に向けて　伊坂 淳一 …… 16

●学びの部屋から

〈話す・聞く〉

少人数指導による「わかりやすく説明する」授業
―『クジラのなぞに迫る！』―

松林 陽子 …… 18

〈読む〉

生徒たちと共有する本の世界　―読み聞かせをとおして―

小西 順子 …… 20

〈読む〉

チョコレートのパッケージを読む

近藤 真 …… 22

〈書く〉

「調べて書く」授業　―考えよう、地球市民の一人として―

内海 まゆみ …… 26

●ことばにせまる

「批判的読み」によることばの学び

河野 順子 …… 28

●キーワードで読む国語教育

「情報教育」「調べ学習」「指導の工夫」

尾木 和英 …… 32

●いま、小学校では

伝え合おう　こころをことばにのせて

鈴木 優子 …… 34

●教師のための読書案内

ILEC言語教育文化研究所 …… 36

●国語教育の『名著』再読

西尾実『言語教育と文学教育』を読む

長谷川 孝士 …… 37

●本の紹介

五明紀春『〈食〉の記号学』　糸井 通浩 …… 39

編集後記 …… 40

+表紙イラスト
藤本亜矢
+表紙デザイン
石川愛子
+DTP 制作
田頭ひろみ

特集

読書指導
10のアイディア

どうすれば読書の魅力を子どもたちに伝えることができるのか。
本特集では、教室ですぐ生かすことができる実践アイディアを紹介する。
また、子どもたちの学びに役立つ学校図書館づくりとは何かを考える。

「実践アイディア」執筆者

林 容子
〔はやし　ようこ〕浜松市立上島小学校教諭。「本の先生」と子どもたちや職員から呼ばれるのがうれしい司書教諭。「授業に生きる学校図書館」「ブックトークのおもしろさ」を研究中。

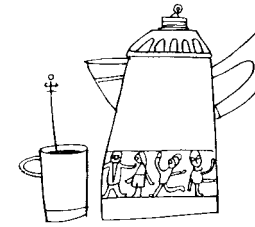
五十嵐 ふみ代
〔いがらし　ふみよ〕市川市立第七中学校教諭。現在は、世界の子どもたちの写真集（学習材として百冊余）を読み解き、調べ、なりきり作文を書く学習に取り組んでいる。

丸山 匠勇
〔まるやま　たかお〕足立区立第十一中学校教諭。今年度、全国中学校国語教育研究大会第八分科会で、読書指導についての発表を行った。年間百冊のペースで読書をし、おもしろかった本を生徒に紹介しつづけている。

エッセイ

楽しみ方それぞれ

立原 えりか



〔たちはら・えりか〕童話作家。二〇〇四年八月に、六十歳を超えた五人の女たちがハワイのフラコンペを夢みてすすんでいく長編『一度でいいから…ハワイ』（愛育社）を出版した。趣味はハワイアンフラとタイ料理。童話創作の講師も務めている。

読書に目覚めたのは小学四年の夏で、少女小説と称された本を次々に読んだ。継母にいじめられたり、会ったこともない祖父を訪ねて一人旅をする女の子の物語がおもしろくてたまらなかった。

「もっと高級な本を読みなさい」と、担任の先生に薦められたのが『少年少女文学全集』だ。『小公子』『小公女』『十五少年漂流記』『宝島』などの名作を手にして胸を躍らせた。名作が少女小説よりも高級かどうかは考えなかったし、考えてもわからなかったと思う。夢中になってストーリーを追いかけながら、次はどうなるのだろうかと、空想の翼を広げる時間が至高のものに思われた。

「少年少女」を卒業すると、『世界名作文学』に手をのばし、『嵐が丘』『女の一生』『モンテ・クリスト伯』などに熱中した。

中学生になって、読書について話し合う男の子に出会った。席が隣だった彼は無類の本好きで、わたしに負けないほどの本を読んでいた。けれど、二人の話は全然かみ合わなかったのだ。彼が愛したのは哲学や歴史に関する本で、文学書にはほとんど触れていない。

「読んだのは、ドストエフスキーの『白痴』と『カラマーゾフの兄弟』だけだな」

彼があげた小説を、わたしは読んでいなかった。ロシア文学は苦手で、トルストイの『戦争と平和』をようやく読んだが、あまりにも重いテーマと、だれがだれやらわからなくなってしまう登場人物の名前の複雑さに、音を上げてしまったのだ。

詩集を知り推理小説を知り、童話に傾倒していったわたしとは違う道を彼はたどった。「重い」本ばかりを追いかけたあげくに、東洋哲学の大学教授になり、わたしは童話を書くようになっている。

「娯楽のために本を読むことはいまだにできない。一ページ読んでは考えにふけった『白痴』のおもしろさが忘れられないんだ」

そう言って彼は笑う。送られた彼の著書を、わたしは理解しようとしたためしがないし、わたしの童話を彼は読んだことがない。二人の読書は決して交わらない線路みたいなものだ。それなのに顔を合わせるたびに、本の話で盛り上がるのだ。本とも人間とも、いろいろなつきあい方があるものだと思う。

実践アイディア
1

図書館のトリビア

小学校　中学校

子どもが図書館に親しみ、読書の幅を広げるために、人気のテレビ番組を活動に取り入れることも有効である。

この活動は、「トリビアの泉」（フジテレビ）からヒントを得た。図書館内の本の中から、他人を「へえ」とうならせるような情報（トリビア）を探し、紹介する活動である。

あらかじめ生徒への手引きとして、番組で情報を紹介するときの話型を参考に、数種類の文章モデルをつくっておく。

・第一次（一時間）

図書館で、情報を探す。

情報を見つけられない生徒には、教師がいくつかの図書を選んで、参考にするよう勧めた。

・第二次（一時間）

ワークシートに、発見したトリビアを記録させる。その際、図書のＮＤＣや出典を記録させておく。図書の文章をそのまま引用してしまう生徒もいるので、教師が点検、添削する。生徒が聞いてもわかる表現に直すようにする。

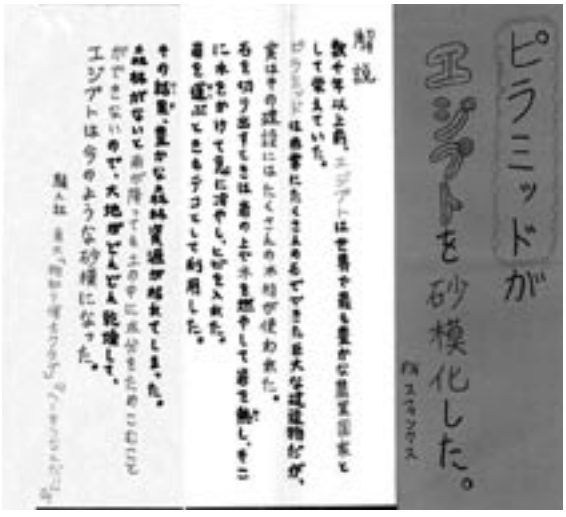
・第三次（一時間）

色画用紙（Ｂ４判）を二枚ずつ配り、発表用兼掲示用として書く。作成したワークシートを裏に貼る。

・第四次（一時間）

作品の発表会を行う。色画用紙を見せながら、裏のワークシートを読み上げる。このとき出典を明らかにする。聴き手の挙手で「へえ」の数（点数）を競う。最後に校内に掲示すると、クラス外の生徒たちにも楽しんでもらえる。

（五十嵐ふみ代）



発表会で使った作品
（「解説」は折って裏返しにして読み上げる）

＊タイトルの横に、それぞれのアイディアに紹介されている活動が小中学校どちらにより適しているかを、目安として○の大きさで示してあります。

実践アイディア
2

「朝の読書」活動

小学校　中学校

「朝の読書」活動によって、本校も読書をする生徒が確実に増えた。しかし、それでも読書が嫌いな生徒はいる。そこで、「朝読」活動支援のため、読書環境の整備と読書嫌いな生徒へのアプローチに工夫をした。

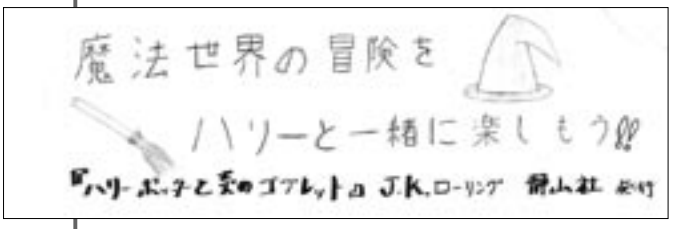
本校では、始業前の十分間図書館を開けて、生徒が借りに来られようにし、生徒の本の予約やリクエストにも必ず応えるようにしている。学級文庫・学年文庫には読ませたい本ではなく、読みたいであろう本を揃えた。学級文庫は数ヶ月で各教室を巡回していく。学年文庫は、生徒や保護者が寄付してくれた本を利用して、図書館から離れている学年用に設置した。

さらに、図書館の絵本を数冊箱に入れて教室まで持っていき、貸し出しをした。副担任が図書館まで生徒を案内し、司書教諭や学校司書が本選びの相談にのったりする。

出版されている本をみると、中学生の、特に男子が楽しめる本が少ないと感じる。読書が苦手な男子には、まず「ミッケ」シリーズ（ウォルター・ウィック、その他・小学館）を勧めることにしている。

一年生の学級で「私のおすすめの一冊」と題して一分間スピーチの活動をした。そのとき作成したポスター（キャッチコピー、書名、作者、出版社、挿絵を記入）を廊下に一斉に掲示。一年生のみならず二・三年生へのお勧めにもなる。上手な生徒のスピーチをお昼の放送で流した。人気のあった本は、「図書便り」に載せた。また読書ポスターは生徒の昇降口に掲示することにし、図書館に来館しない生徒の目に触れるようにもしている。

（五十嵐ふみ代）



「私のおすすめの一冊」でつくったポスター

実践アイディア
3

ブックトーク

小学校　中学校

ブックトークというと、あるテーマに沿って何冊かの本を紹介する、というスタイルが一般的だが、あまり読書が得意でない生徒にとっては、難しい面をもつ。もちろん自分の読書の世界を広げていくためには有効な方法でもあるのだが、そこにこだわりすぎると、せっかくの読書の楽しみが奪われてしまいかねない。

そこで思い切って、中心に紹介する本以外はどんなものでもよい、というブックトークを行った。マンガ・映画・音楽、なんでもありである。

すると、生徒は実に楽しそうにブックトークに参加するようになった。なかには、本よりも先に紹介したいマンガや歌があり、それを紹介するためにはどんな本を中心にしたらよいのか、と考える生徒も出てきた。ほとんどの生徒が実は紹介したい本を一冊は持っており、そこから次はどんなものにつなげていこうかと、わくわくしながら考えていた。

より多くの本を紹介するための工夫もした。中心になる本のキーワードをいくつかまとめ、それを鍵にして次の本を探すようにした。そのとき、班の中で情報交換をするとともに、クラスの掲示板に「こういう本はありませんか」というリクエスト・カードを貼っておき、クラス全体からも情報を集められるようにした。そこから次の一冊へのつながりを考えさせたのだが、実にさまざまな方向に広がっていき、今までにないブックトークになった。

発表のときも、BGMやビデオ・自作の紙芝居なども使ってよいことにしたので、演出に凝ったブックトークも多くみられ、楽しそうに発表していた。また授業の最後の五分間は、お互いが持ってきた本やビデオなどについて自由に話せるような時間にしたので、多くの生徒が紹介された本を手に取ってみたり、情報交換をしたりしてそれぞれの本の世界を広げていた。

（丸山匠勇）

実践アイディア
4

読書郵便

小学校　中学校

「『エルマーとりゅう』を読むと、いっしょに冒険にでかけたくなるよ。エルマーは冒険に何を持っていったでしょうか。答えは…、読んでみてね。」

友達から届けられた読書郵便はがきをうれしそうに読む子どもたち。

「読書郵便」は、気軽に取り組むことができる読書活動であり、読書記録として活用できる有効なものである。

お気に入りのさし絵を添えたり、はがきの中でクイズを出したり、アイディアあふれる作品が校内を行き交う。

読書週間行事の一つとして「全校読書郵便」を行った。はがきは、学級内でつくったペア、あるいはペア活動（上級生と下級生がペアを組んで、一年間、特別活動や行事でいっしょに活動すること）の相手に必ず一枚は出すように指導する。上級生が下級生にもわかるようにことばを探しながらはがきを丁寧に書く姿は、ほほえましい。

校長先生にはがきを出したら、温かなことばにすてきなスケッチの添えられた返事が届き、「ずっととっておくんだ。」と大喜びの子どもたちもいた。

生活科で郵便局で働く人について学んだ二年生が、「ちびっこゆうびんやさん」になって配達することもできる。

先生方に「おすすめの本」を読書郵便はがきの形式で書いてもらって展示するのもよい。学年に応じた本を紹介してもらい、その本を置いたコーナーをつくると「読書案内」コーナーができあがる。

そのコーナーには、アーノルド・ローベルの『二人はともだち』（文化出版局）をぜひ置きたい。「お手紙」に登場するがまくんとかえるくんのやりとりは、手紙が人と人の心を結ぶすてきなものであることを、教えてくれる。

（林容子）

実践アイディア
5

アンソロジーづくり

小学校　中学校

図書館で生徒にあまり手に取ってもらえないジャンルの一つが詩集である。しかしながら、近ごろは中学生が楽しめる詩集が多く出版されている。

そこで、詩に親しませるために、中学三年生で詩のアンソロジーづくりをやってみた。たくさんの詩集から好きな詩を選ばせ、アンソロジーとして一人一人に一冊の本としてまとめさせる。最後に生徒が一番好きな詩を自分の詩集から選び、詩の朗読会を行う活動である。

学習開始十日前から学習内容の予告をし、教師の好きな詩を毎時間一編ずつプリントにし、朗読して紹介していく。

・第一次（三時間～五時間）

詩集を読み、詩を選ぶ。B5判の紙に視写する。十二月から始めたので、冬休みに詩集を読んでおくように指示した。三学期に入ると受験などで生徒の欠席が多くなるので、こういうときを利用して視写をさせた。授業時数によるが、いくつか書きためさせるとよい。歌詞も取り入れると意欲が増す生徒が多い。緊張を強いられる時期なので、詩で心癒される生徒が多かった。

・第二次（三時間）

表紙、目次、中扉、あとがき、奥付をつくる。そのための手引きが必要。

・第三次（一時間）

詩集の本づくりをする。表紙や扉などと本文を張り合わせ、一冊の本として製本する。最後にブックカー（ビニルコーティング）をかけた。

第四次（二時間）

詩の朗読発表会、詩集の鑑賞会を行う。生徒にとっては自分の好きな詩の朗読だけに、自然によい「話す・聞く」学習の場が生まれた。

（五十嵐ふみ代）

生徒が好きな詩を集めてつくった詩集

実践アイディア
6

推薦図書ポスター

小学校　中学校

最近の中学生は絵を描くのが上手な生徒が多い。イラストやデザインが深く彼らの生活にかかわっているせいもあって、単に模写するだけでなく、まとめる力をもっている生徒も多い。

そこで図書の紹介用に推薦図書ポスターを一枚描いてくる課題を夏休みに出したところ、かなり上質なポスターが何枚も集まってきた。単に本の一場面や表紙を模写した作品だけではなく、扉が付いていて中を開いて見るようなポスターや、コラージュのように新聞紙をうまく活用したポスターなど、さまざまなポスターをつくってきてくれた。

ポスターの用紙には、もともと上部に題名を書く大きなスペースを、下部に作品の内容や作者名を書くスペースをつくっておいたので、それだけで充分人目をひくようなポスターになっているものが多かった。

せっかくのポスターなので、できるだけ全ての作品をあちこちの廊下に掲示しておきたい。それだけで学校中に読書の雰囲気づくりができる。もちろん購入図書の表紙を掲示するのも有効な方法なのだが、同級生がつくっているポスターの方が、より興味・関心をもって見てくれる。B4判の画用紙でつくれば、多くの本の表紙より大きいので効果も抜群である。

また、掲示してある場所をときどき替えてやると、今まで目につかなかった作品に気づいたりするのでより効果的であるし、文化祭の展示に使い、見学してくれた人に投票してもらうかたちでポスター・コンクールを実施することも生徒の興味・関心をひくことができる。

いろいろな人から本の紹介を受けている生徒ほど、読書に対して熱心であるといわれている。毎日通る廊下や階段から、無言の紹介を受けていれば、きっと読書に対する関心も高まっていくにちがいない。

（丸山匠勇）

実践アイディア
7

授業の中の読書指導

小学校　中学校

学習指導要領「国語科」では、小学校中学校ともに、【A話すこと・聞くこと】【B書くこと】及び【C読むこと】の言語活動の指導で学校図書館を計画的に利用し、その機能の活用を図ることが述べられている。

特に「読むこと」にかかわる単元や教材に読書を位置づけ、子どもの日常生活に広げていくよう教育計画を立案していきたい。

子どもたちの読書の幅を広げるために、授業での意図的計画的な働きかけが求められている。

国語科の授業をとおして、読書意欲を向上させ、望ましい読書態度を育てていきたい。

六年の国語科では、「やまなし」の授業で宮沢賢治の作品に数多く触れ、ファンタジーの世界を楽しむ活動を計画した。

賢治の作品を紹介する時間を一時間とり、前半、教師がブックトークを行い、後半は子どもたちが自由に閲覧する時間とした。また、朝の読書の時間に作品を紹介したり、教室の外に設置してある書架に図書館の賢治の本を並べたりして、可能な限り子どもたちが賢治の作品に触れる機会をつくった。

賢治の作品を存分に味わった子どもたち、最後には子どもどうしブックトークで伝え合う活動で締めくくった。

二年の生活科では、「野菜づくり」に図書を積極的に活用した。国語科の植物の知恵に関する説明文の学習をきっかけに、植物に関心をもった子どもたちは、意欲的に、育て方や特徴について調べることができた。この授業をとおして、お話の本にかたよりがちだった子どもたちが、自然科学の本にも手をのばすようになった。

（林　容子）

実践アイディア
8

図書委員会活動

小学校　中学校

学校内の子どもたちや職員に、読書の意義や図書の活用の仕方などを幅広くうったえるために、図書委員会の活動は重要である。

例えば、学校行事とのタイアップは有効だ。

給食週間、人権週間、保健週間など、教育課程の中に「～週間」と位置づけられているものがある。それらに合わせて委員会の活動を行う。

保健週間では、体の仕組みや働き、病気や風邪の予防、食生活の大切さ、薬物被害防止などに関する本を展示したりクイズをつくったりする。

このような活動は、各行事の担当職員の理解が不可欠であり、図書委員会が行事にどうかかわるのか、綿密な打ち合わせをしておきたい。

可能であれば、校外での活動も、委員会の子ども自身の学びの場にもなり、有効だ。

絵本のよさを幼稚園の子どもたちにも伝えたいと、委員会活動の一つとして近隣の幼稚園で読み聞かせを行った。

幼稚園の子どもたちが喜びそうな本はどれだろうか、読む速さは、声の大きさは、本の持ち方は…。練習をとおして、子どもたちは「伝える」ことの難しさと楽しさを学んでいく。

読み聞かせをとおして、ふだん何気なく読み飛ばしてしまいがちな、一つ一つのことばの重みや味わいに気づく子どももいる。

学校内でも、ペア活動（7ページ参照）の一つとして、上級生が下級生に読み聞かせをする楽しい活動も、子どもたちの言語生活を豊かにしている。

（林 容子）

実践アイディア
9

ブックリスト

小学校　中学校

生徒に本を紹介したり、体系的に読書指導をしようとするとき、自分なりの「マイ・ブックリスト」があるとなにかと便利である。そこでまず自分なりのベスト・ブックを選んでみよう。

といっても、今まで読んだ本がなかなか思い出せないことが多いのではないだろうか。そのため、いくつかの文庫の解説本を集め、そこに載っている本の中からいくつか印象に残っている書名を挙げ、簡単なリストをつくっていくことから始めると、意外と記憶が戻ってくる。

私は大学生のころから「読書ノート」をつけており、読了した本について、その日付・題名・作者名・出版社とごく簡単な評価を一行書いている。そんなノートをつくっておくと、のちのち非常に便利である。

マイ・ブックリストをもとにして、今度は「中学生に薦められる」という観点を足して、生徒に紹介できる本のブックリストをつくっていく。これは、生徒へのわかりやすさということや、授業との関連性を考慮し、いくつかのテーマ（生命、平和、生活といった、できるだけ教科書ともリンクできそうなもの）にまとめ、学年別、というより難度順にいくつか分類しておくと、それこそいろいろな場面で活用することができる。また生徒からも積極的におもしろかった本の情報を仕入れ、ブックリストに足していくと、常に最新の「ブックリスト」を手にすることができる。

最近こういったブックリストの重要性が認識され始めており、ランク別のよくできたリストを目にするようになってきた。また教科書会社などのウェブサイトにも「中学生に勧めたい１００冊の本」といったページがあり、「マイ・ベスト・ブック」のリストづくりに大いに参考になるので、一度のぞいてみてはいかがだろうか。

（丸山匠勇）

ブックリストの例

テーマ「生きる・いのち」

○「マイ・ベスト・ブック」平成14年1月5日版より

１　アルジャーノンに花束を【中編】
（ダニエル・キイス／早川文庫）・・３位
・知的障害があるチャーリー・ゴードンが、画期的な脳手術を受け、みるみる天才に！しかし先に同じ手術を受けていたネズミのアルジャーノンの運命は！！全く前例のない文章と構成で、読者をグイグイと引き付ける一冊。
最後の一文を読んで、涙がこみあげない人はいない！！！

２　ラブ・ストーリー
（エリック・シーガル／角川文庫）・・・５位
・恋とは、富とは、宗教とは、そして生命とは！映画化もされ、観衆の涙を誘った本作品は、文字通り「ラブ・ストーリー」の古典として、いつまでも私たちの心に生き続けていくにちがいない。

３　どくとるマンボウ青春記
（北杜夫／新潮文庫）・・・６位
・人には誰しも疾風怒濤の時期がある。生きているとはどういうことなのか、青春とはなんなのかを作者一流のユーモアを混ぜて、楽しく私たちに教えてくれる一冊。

⋮

実践アイディア
10

ボランティアの導入

小学校　中学校

「本をとおして子どもたちに楽しさや夢、希望が与えられるとしたらこんなにうれしいことはありません。」ある図書館ボランティアの方から寄せられたことばである。

現在、各地で学校図書館にボランティアの導入が進められている。筆者の勤務する浜松市でも、多くの小学校で図書館ボランティアが活躍している。

温かな声で心をこめて語りかけてくれる読み聞かせの時間は、子どもたちの大好きなひとときである。

朝読書の時間。教室では、ボランティアの方の読み聞かせに目を輝かせる子どもたちの姿がある。

昼休みのオープンスペースでは、自由参加の読み聞かせ。リラックスした中で読書の楽しさを味わう子どもたちがいる。

読み聞かせは小学生だけのものとは限らない。高校野球部の生徒に読み聞かせをする『本を読んで甲子園に行こう』（村上淳子著・ポプラ社）を読むと、本の力、読み聞かせのすばらしさを再確認できる。

図書館ボランティアの活動は多彩に繰り広げられている。季節にちなんだ壁面掲示や展示物の作成、人形劇やパネルシアターなどの読書イベントなど、ボランティアパワーで、図書館が子どもたちの心を和ませる場所へ、みるみるうちに変身していく。

地域に伝わる昔話を大型紙芝居にし、上演したこともある。脚本づくりから、切り絵の作成、上演まで全て手づくり。創造的な取り組みは評判となり、地域を学ぶ総合的な学習で活用した。

近隣の幼稚園でも上演したり、地域の方々への公開も行ったりする中で、学校はボランティア活動をとおして地域文化活動の拠点となる可能性をもっていることを実感した。

地域の教育力は大きな力となっている。

（林 容子）

「学習センター」「情報センター」としての学校図書館づくり

藤田 利江　厚木市立北小学校

1　学校図書館の役目は何か

平成九年、学校図書館法が改定され、十二学級以上の小学校、中学校、高等学校に司書教諭が配置されることになり、十五年度、司書教諭の配置が全国でスタートした。同法が制定されてから実に四十年以上、司書教諭不在のままだった学校図書館に人の配置が実現したことになる。しかし、現実には専任の司書教諭はごくわずか。兼任がほとんどの状況で、以前と変わらないという声があちこちで聞かれる。

ようやく司書教諭配置が実現した今こそ、学校図書館はその機能を果たすことを目指して活動したいものである。

筆者は、十六年ほど前に司書教諭の資格を取得した。取得のための学習の中で、学校図書館が、さまざまな情報を収集し、子どもの学習を支援する場としての機能をもつことを、強く意識するようになった。

当時はまだ、地区の図書館研究会でも「どんな本を読ませるか」といった議論が主流だったころで、筆者自身も、図書館は本を読む場所であるとしか認識していなかった。以来、「学習センター」「情報センター」としての図書館づくりが、筆者の司書教諭としてのテーマとなり、常に「いかに資料を充実させるか、その資料をもとにどんな学習支援をしていくか」を考えるようになった。

2　「学習センター」「情報センター」実現に向けて

(1) 資料を収集する

まずは、学校図書館を「情報センター」として機能させるために、集められる資料はなんでも集めてみた。学校には、市町村の広報紙や教科関連の研究冊子など、一年間でもかなりの数の資料が届けられる。それらは必要に応じて職員に回覧されるが、その後の保管方法については必ずしも明確になってはいない。しかし、それらの情報の中には学習に役立つものもある。

そこで職員には、必要がなくなった資料は残さず図書館に回すように依頼した。さらに、遠足や学習で訪れた場所や、職員が個人的に出かけた場所の資料なども図書館に持ってきてもらうよう、協力を呼びかけた。小学生新聞も役に立ちそうな記事の切り抜きをファイルした。

こうして集めた資料は、子どもたちが学習に活用できるよう、件名ごとにキャビネットや空き箱に入れて分類・整理を続けてきた。

(2) 司書教諭の活動時間を確保する

司書教諭の活動を円滑に行うには、特に兼務の場合、活動時間の十分な確保が必要である。そこで勤務校で、配置前の平成十四年度から、校内研修会で司書教諭の活動がどんなものかを話したり、活動時間をどうしたら生み出せるかなどの提案をしたりした。その結果、十五年度から週五時間の司書教諭と

司書教諭の授業
1年生「じどう車くらべ」
導入で読み聞かせをしているところ

図書館の学習コーナーの資料を利用しているところ

しての活動時間を確保することができた。それからはこの時間を使って、担任と協働で行う授業（ＴＴ的な授業）をはじめ、図書館資料の整備をしたり、パソコンなどの情報機器も利用した情報収集の支援をしたりしてきた。

　このような活動を始めて気づいたことは、子どもたちの学習に、学習用に用意されたもの以外の資料が多く使われていること、子どもたちがそれを当たり前のように読んでいることである。もちろん、漢字が難しくて内容がわからないとか、どんな資料を利用すればよいのか悩むことも多くある。しかし、少なくとも「学習のための読書」が、子どもたちには根付いているのだ。

（3）担任と連携して活動する

　筆者は、担任と司書教諭が協働で展開する授業を、なるべく多く実践したいと考えている。四年生の社会科「きょうどにつたわるねがい」では、厚木市内を流れる「玉川」を取り上げ、洪水を繰り返し大きな被害をもたらしてきた川の改修工事の話をきっかけに、昔の人々がどのように生活を改善してきたのかについて、レポートを作成する活動を行った。この中で筆者は司書教諭として、次のような支援を行った。

　まず、玉川にかかわる本や冊子、写真、ビデオなどの資料を集め、授業の中で、それらを基に「玉川水害」について説明した。当時の地域の様子や人々の思いが綴られた調査資料は、四年生には難解なことばをわかりやすく置き換えて説明した。また、難事業だった改修工事の写真を見せて、その大変さを想像させた。

　さらに、厚木市の外にも目を向け、神奈川県下の河川改修や新田開発なども取り上げることにした。各市町村の観光課などに連絡して、冊子やパンフレットなどの資料を送ってもらい、届いた資料は、子どもがすぐ使えるよう分類・整理し、授業に備えた。玉川の学習で郷土の歴史に親しみをもった子どもたちは、それらの資料を見ながら、市外の事例についても関心をもって学習することができた。

　このように情報の収集、選択、加工について学習をするとき、司書教諭が図書館を使って情報収集の支援をすることで担任の負担は軽減され、その分、子どもたち一人一人に、よりきめ細かな学習の支援をすることができると考える。

　残念ながら、司書教諭の活動時間が確保されていない学校はまだまだ多いようだ。学校図書館に学ぶための情報があり、学びたいことが学べる環境を提供できる学校図書館であるならば、児童生徒に本来の学ぶ力が培われることであろう。司書教諭や学校図書館担当者は、そういう図書館づくりを担う任務があることを再認識し、実行に移していきたい。

〔ふじた　としえ〕厚木市立北小学校教諭。担任との兼務で司書教諭を務める。著書に『学習に活かす情報ファイルの組織化』（全国学校図書館協議会発行）がある。また、司書教諭一年目の実践をまとめた著書を近々発行する予定。

漢字学習の新しい枠組に向けて

伊坂 淳一　千葉大学

本稿の筆者は、『ことばの学び』第六号（二〇〇四年十月）所載の拙論「言語事項の学びのあり方としての漢字学習」（以下「前稿」）において、漢字についての知識・理解を照準としたメタ学習についての私見を述べた。もちろん、漢字学習の到達点が、漢字を運用する力を身につけることにあることはいうまでもない。しかし、実際の読み書きの学習、特に中学校段階におけるそれには、多大な困難が立ちはだかっているというのも現実である。そもそも中学校三年間で、いったいどれほどの漢字を習得することが求められているのであろうか。

中学校学習指導要領では、常用漢字一九四五字の「大体」を読めること、学年別漢字配当表の漢字（小学校の学習漢字）一〇〇六字のうちの九五〇字「程度」を書けることを求めているが、単にそれだけではすまない。実際には、

・中学校段階で学ぶいわゆる新出漢字（以下「中学漢字」）九三九字
・中学校段階で学ぶ新出の音訓（以下「中学音訓」）二〇五字
・中学校段階で学ぶ熟字訓（以下「中学熟字訓」）五一語
・小学校六年配当漢字（以下「小六漢字」）一八一字

が、その対象となる。中学音訓と小六漢字との重複が六七字あるが、小六漢字は「書き」を学ぶことになっているから両者の扱い方は異なり、したがってここは二重にカウントする必要がある。

これまで漢字は、文学的文章や説明的文章の「文脈」の中で「新出漢字」として学習することが「常識」とされてきたが、あえてその「常識」を疑う必要があるという主張を、牧戸章「確かな漢字指導・語句指導を求めて」（『月刊国語教育』二〇〇三年八月号）が述べている。読むこと学習材の文脈に現れる漢字が生活世界の文脈とは異次元であること、読むこと学習材の中に新出漢字を置くことが漢字学習にも読むことの学習にも足枷になっているかもしれないことを論拠とするが、同感である。

牧戸論文は、中学校検定教科書五種に共通して採用されている、二年生の文学的文章学習材「走れメロス」を例として、「新出漢字」が五種それぞれ三四字・二七字・三三字・三六字・三七字と統一性がないこと、全種に共通するのはわずか「虐・婿・亭・疾」の四字にすぎないことから、結局、「新出漢字」をその読むこと学習材のその「文脈」の中で学習することに必然性がないこと、他の読むこと学習材などとの順序

性によって恣意的に選ばれていることを指摘している。

ところで、国語全体の授業時間数減、表現系の学習時間増の現実の中で、読むこと学習材に費やせる時間は限られている。試みに平成十四年度版中学校国語教科書『現代の国語』（三省堂）における「新出漢字」の配当を調べると、上の表のようになっている。いかに「文脈」の中で漢字を学ぶことが困難であるか、そして、ドリル的な学習に依存しているかがわかるであろう。読むこと学習材への漢字配当を増やせば、読むことの学習を圧迫することは避けられないし、そもそも出てこない漢字は配当のしようもない。

	中学漢字	中学音訓	中学熟字訓	小六漢字
読むこと（文学系）	185	35	6	54
読むこと（非文学系）	125	14	4	33
読むこと（古典系）	44	17	4	0
話す聞く・書くこと（表現系）	50	6	0	0
文法・語彙など（言語系）	158	32	21	0
漢字ドリル系	307	85	2	0
本文未掲出	70	16	14	94
全体	939	205	51	181

加えて、これからの国語学習は、教科書をはじめから順序よく読んでいくということでは成り立たなくなってきている。教科書学習材の学習する順序を入れかえる、資料編の学習材と入れかえる、教科書の外に資料を求めて調べたり読み比べたりするなどの、開かれた国語学習、弾力的で個性に応じたカリキュラム編成を模索していくようになってきている。そうしたカリキュラムの下では、どのような「新しい」漢字が出てくるか、全く予想はつかない。

もちろん、読むことの学習の中で、文脈の中に出てくる漢字に語句レベルで注目したり、漢字を語句レベルで見直して読みに結びつけたりすることを否定はしない。しかし、それだけで必要とされる漢字全てが覆いつくせるわけではない。だからこそ、これからの漢字学習の新しい枠組を考える必要がある。ただしそれは、「単なる『機械的』な「繰り返し」による習得を目指したり、目先だけをおもしろそうに見せる『クイズ』的なドリルであったりする習得ではない」（牧戸前掲論文）はずである。

考えられる新しい枠組の一つは、漢字をグループ化してとりたて指導をする方法である。グループ化は、

・漢字のしくみ（形と読み）による

・漢字の意味による

ものなどが考えられ、前者については前稿でその一端を示した。いずれの場合も、グループ内の漢字の相互関係を有意味化し、学習者の日常世界や学習の場に出現しうる適切で具体的な短文を与えることが必須である。そしてこの枠組の中に、中学漢字・中学音訓・中学熟字訓・小六漢字すべてを包括的に配置した新しい体系が実現できれば、意義ある漢字学習の独立した世界を開くことができるはずである。

〔いさか　じゅんいち〕千葉大学教授。言語事項の既成概念、伝統的な学習内容・学習方法を、あえて国語学プロパーの立場から変革することを目指している。著書に『ここから始まる日本語学』（ひつじ書房）など。

少人数指導による「わかりやすく説明する」授業

―『クジラの謎に迫る！』―

作成したフリップの例

松林 陽子
目黒区立第八中学校

本校は今年度から国語の授業で少人数制を試みている。一クラスを二つに分けるのであるが、どの単元で、どのような分け方をするかを模索中である。次に紹介するのは、出席番号で二つに分けて半分の人数により行った「わかりやすく説明する」ことをねらいとした授業である。

《授業の流れ》

一「クジラの飲み水」に学ぶ説明の形

教科書教材「クジラの飲み水」（大隅清治『現代の国語1』三省堂）は、問題提起・仮説一～三・結論という説明文としてわかりやすい構成の文章である。「まず第一に…」「次に考えられるのは…」「このように…」などのことばが論理の展開をわかりやすく導いている。まずはこの構成にそって、「クジラはどのように飲み水を得ているのか」という謎を読み解いていった。

二　各々のテーマでクジラの謎に迫る

『毎日中学生新聞』に本年三月より、「Dr．カトーのクジラ学入門」が連載された。一回分が千字程度の読みやすい分量である。これに、『クジラの謎・イルカの秘密』（ネイチャー・プロ編集室・河出書房新社）「クジラたちの音の世界」（中島将行『国語1』光村図書）より選んだ資料を足し、八種類のプリントを用意した。これをそれぞれ番号をふった封筒に入れ、二人～三人のグループに一つずつ渡した。この資料を読んで、自分たちだけが知っている情報（クジラの謎）を、他のグループにわかりやすく説明するのである。

どのグループにどの資料を渡すかは、メンバーの特性を考え、指導者が選んだ。「ええ！　ぼくたちが1番？」などと言いながら、自分たちだけの資料というのがちょっとうれしいようであった。

テーマ一覧

1　クジラは陸から海で生活するようになる過程でどのような工夫をしたか
2　クジラの歯はどのような役割をはたしているか
3　クジラはどうやって餌をとるのか
4　クジラはなぜ季節ごとに住む場所を変えるのか
5　クジラの年齢をどうやって知るか
6　クジラの集団座礁はなぜ起こるか

7　クジラはどうやってコミュニケーションをとっているか
8　イルカ（クジラ）は本当に人を助けるのか

説明に使うのはA3の画用紙（フリップ）二枚。これに必要なことば・図・絵などを書いて資料とする。説明に当たっては次のような点を注意した。

・問題提起の話形「～だろうか。」、説明の話形「第一に（まず）…」「第二に（次に）」、結論の話形「このように」を使って内容を要約する。
・常体の本文を話しことばの話形に直す。
・本文にある漢語を、耳で聞いてわかることばに言い直す。場合によっては漢字で板書して示すこと。
　例　海洋→海　雌雄→雄と雌
・フリップは、遠くからでも見える大きさで。出すタイミングも工夫する。

発表原稿とフリップを準備する時間は二時間。今回は絵や図は、拡大コピーを貼るようにして時間短縮を図った。

三　発表会

テーマの順に発表時間二分で、グループごとの発表を行った。聞き手は「初めて知ったこと」「発表でわかりやすかった点」を簡単にメモしながら聞くようにした。

《少人数制の有効性》

1　活動するにあたり、相談に乗ったりアドバイスしやすい。
2　資料の数・マジックペンなどの道具の数が半分で済む。
3　話し手にとって、半数の生徒の前で話すことで緊張感がやわらぐ。
4　聞き手にとって、飽きずに聞ける発表数で落ち着いて聞くことができる。

《少人数制の課題》

この活動を行っている間、残りの半分の生徒は、別の指導者によって「アイスキャンデー売り」（立原えりか）などの戦争教材の読解を行った。五時間ずつで交代する形である。どちらのグループにとっても少人数で行うことは有効であったが、問題があるとすれば、予定時間を絶対オーバーできないこと。生徒によって授業を受ける時期がずれることである。

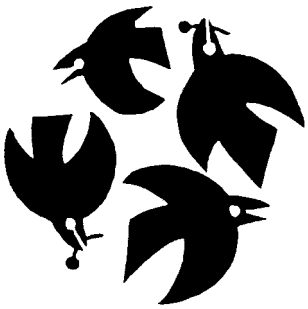
この活動の前に取り組んだ「自分新聞づくり」などは、説明は全体で、活動は二つに分けてというやり方で行った。いずれも習熟度別の分け方はしていない。国語の学習のおもしろさはいろいろな生徒のさまざまな考えに触れ、刺激しあえるところにあると思われ、数学・英語の少人数制とは違ったやり方でよいのではないかと考えている。

発表風景

〔まつばやし　ようこ〕東京都目黒区立第八中学校に今年度から勤務。いい本に出会うとすぐ人に紹介したくなる。そんな体験から、大村はまの会で「チェーン読書」について発表。

生徒たちと共有する本の世界

―読み聞かせをとおして―



小西 順子
大阪産業大学附属中学校

1　読書の時間

「この本読んでみたら？」

「え～っ。字が多いし、だるいわ」

四月、初めて中学一年生を図書室へ連れて行ったときの会話である。自由に本を選ばせ五十分の授業を読書にあてたが、集中していたのは二割。ほとんどの生徒が十五分くらいで集中力がとぎれてしまう。読書の習慣がないと実感した。そこで一年生二クラス（五十名）に読書歴アンケートを実施した。

○読書について
　好き…二十二名　　嫌い…九名
　ふつう…十九名
　＊「嫌い」と答えた生徒のうち七名に読み聞かせ経験がない
○幼少時の読み聞かせ経験
　あり…四十名　　なし…十名
○小学低学年のころ絵本や童話を
　よく読んだ…十七名　　たまに読んだ…十三名　　読まなかった…十九名
○一ヶ月に何冊本を読むか
　○冊…二十九名　　一～三冊…十九名
　四冊以上…二名
　＊マンガは含まない

意外にも八割の生徒が読み聞かせをしてもらった経験をもっていることがわかり安堵した。しかし一方で、その後読書（絵本・童話）に進んだ生徒は三割に減少していて驚いた。読書が「好き」な理由は「自分の世界にのめりこめる」（七名）「想像するのが楽しい」（四名）「おもしろい」（八人）「勉強になる」（三名）。「嫌い」な理由は圧倒的に「めんどうくさい」が多く「漢字が読めない」「いらいらする」「あきる」「肩がこる」などが続く。本に親しんでいない実態が明らかになり、読書指導の必要性を痛感した。

わが校は新設の中高一貫校で、全校生徒百五十人程度の小さな学校である。週六日制で土曜日は四時間、平日は七～八時間授業。補習もあるので放課後の読書活動は難しい。「朝の読書」も考えたが、毎朝英・数・国の小テストを実施しているので不可能である。それならば週八時間の国語の授業中にやるしかない。

2　読み聞かせの実践

アンケートの結果をみて、読み聞かせの段階からやりなおそうと考えた。

まず自分が楽しいと思う本を選ぶ。課

題図書や各種の賞に惑わされないようにした。次に、内容が生徒たちに合っているかを吟味した。生徒の気質にマッチするか、生徒の心に害を与えることはないかと自問した。読み出してからも生徒の心を乱すことがあれば、飛ばしたりアレンジしたり中止することもやむを得ない。結局『夏の庭』（湯本香樹実・徳間書店）に決めた。主人公の年齢が生徒に近く、話の進行と実際の季節が合致しているのが決め手となった。

読み聞かせは授業開始直後の十分間ほどに行った。最後に読むのではなく、学校全体が静かで集中度の高い一番ぜいたくな時間にする。読み聞かせの時間は「おまけ」ではないのだ。読み始める前に生徒たちが聞く気になるための時間を二、三分与える。決して「早くこっち向いて。背中を伸ばしなさい！」などと威圧的な態度はとらない。またテスト前は読まず、授業態度が悪いときは「おあずけ」とした。読むときは毎回同じ速さを心がけ、あまりドラマティックに読まないことにした。生徒が自分の世界を創るのを妨げないように留意する。生徒に求めたのは、私語をせずリラックスして自由に想像することだけである。

中間テスト明けの五月中旬からスタートし、二週間の夏休みをはさんで二学期はじめの八月末に読了した。読み始めて一ヶ月もすると、教壇に立つ私が『夏の庭』を持っているかどうかを確かめ、急に居ずまいをただす生徒がいた。授業開始時に教室がざわついていると「静かにしぃや」「聞こえへん」という声がとび、早く早くと催促するようになった。読み始めると、目を閉じてうつぶせになったり、手遊びしたりと、姿勢は良くない者もいるが、だれも私語しない。読み終えるとふわ～っとした空気がひろがり、やわらかに緊張感が緩む。そのまますぐに授業をするのだが、スムーズに授業に移行でき、読まない日に比して集中度が高いと感じる。読まない日が続いても生徒たちはストーリーを忘れない。これは意外な発見だった。彼らの中に自分自身の物語世界がひろがっているからだろう。

3　読書の世界へ

読んでいる間は一度も感想を求めなかったが、読了した日に感想を書かせた。いくつか抜粋してみる。

☆最後の方は三人の少年とおじいさんの顔が浮かんできて楽しく聞けた。自分でも一回読んでみたいと思った。（K司）

☆物語が進むにつれて人だけでなく家やマンションや細かいところまで想像した。（A奈）

☆耳で聞いていただけだけど、私が今まで十三年間読んできた本の中でこれが一番おもしろかった。すごくイメージしやすかった。（Y子）

☆おじいさんが死んでからの三人の続きをずっと想像していました。（H季）

☆最初「何やこれつまらんな」と思ってましたが、だんだん三人の行動がめっちゃおもしろくて早く読んでほしいと思いました。（K平）

「自分で本を読もう」という気持ちをもったという効果は大きい。また『夏の庭』の文庫本を手にしている生徒もいた。繰り返し読んでいるという。この一冊が読書の世界の扉を開ける鍵になってくれたらうれしい。

〔ここにし　じゅんこ〕子どもたちには、良質の児童文学・ヤングアダルト本を読み、奥行きのある読書の世界を知ってほしい、と願っている。

チョコレートのパッケージを読む

近藤 真　佐世保市立愛宕中学校

1　モノが触発する読み

「学び」が「身体の想像力の働きであり、モノや人や事柄と〈出会い〉、新しい世界や自分と〈対話する〉身体技法によって遂行されるいとなみ」（佐藤学『学びの身体技法』）であるならば、テキストを教室で読む・読み合う行為を通じていかなる「学び」を成立させることができるか。ここに私の問題意識があった。授業を重ねるうちに、やがて、教室の外にあるモノや人や事柄と生徒を出会わせる（関係づける）役割としての教師の仕事の大きさに気づいた。

確かにモノを教室に持ち込んだとたんに学びは活性化する。例えば「三月の甘納豆のうふふふふ」（坪内稔典）の授業。教室に甘納豆を持ち込んだ。生徒はその一粒をてのひらに載せ、縦、横、斜めからためつすがめつ眺めると、舌の上に載せた。たった一粒の甘納豆は彼らの想像を無限に触発する。具体的事物を五感でしっかりとらえれば、句の読みは格段に深まり、解釈に重層性と多義性がもたらされる。このようにモノが触媒となって生徒のことばが沸騰するさまを、私はいくつかの授業で目の当たりにした。

今回の授業は森永と明治の板チョコを教材にした。商品名もともに「ミルクチョコレート」。一九一八年、森永は日本で初めてチョコレートをカカオ豆から一貫生産した。それから八年後の一九二六年、明治が続いた。以来、両者は「チョコレート八十年戦争」と形容される開発と販売の競争を続けているという。その結果はチョコレートの品質の高さばかりでなく、パッケージの完成度の高さにも表れている。包装紙の一定のスペース（表現の枠組み）に、必要な情報を圧縮して記述する。これもチョコレート同様、時間をかけ慎重に練り上げられた「作品」となっている。ことばのありようが商品の売り上げに結びつくだけに、ことは重大である。言語表現が企業の生き死にかかわるといっても過言ではない。ゆえに両者の包装紙は、完成度の高い国語教材となる可能性をはらんでいる。

2　作られたイメージ

授業に入る前にアンケートを採った。「あなたは森永と明治いずれのチョコレートを選ぶか」結果は三クラス八十二名

中、「明治」を選んだ者五十六名、「森永」十三名、「決められない」十三名。明治の圧勝である。

【明治派】

○チョコを買おうかなあと思って見ると、慣れ親しんでいる明治のパッケージがぱっと目につくし、明治の板チョコというように頭にインプットされていて、チョコらしいチョコ。

○ベッカムがＣＭに出ている。多くのお金を使っていてチョコも豪華そう。

○パッケージが明るいので店でも目立つ。ＣＭの歌が耳に残る。はなやか。

【森永派】

○ＣＭにＫｉｎｋｉＫｉｄｓが出演している。

コマーシャル、プレゼンテーションの力を目の当たりにする結果である。明治の周到で積極的なイメージ戦略は圧倒的な力を発揮している。私たちは自分の舌で味わう前に、視覚と聴覚においてすでに明治のチョコレートを知っている。長年テレビを通じて繰り返し聞かされ、四十七歳の私も十三歳の中学一年生もともにその耳の奥に鳴り続けている短調の単純なフレーズに加え、圧倒的人気を誇る英国のサッカー選手までＣＭに起用した。視覚と聴覚の攻勢によって「チョコレートは明治」の副助詞「は」（「判断の対象や叙述の内容がその範囲内に限られることを表す。」〈『新明解国語辞典』以下『新明解』〉この機能は『枕草子』冒頭「春はあけぼの」の「は」に同じ。）がいつしか強力な接着力を持つに至ったのである。

3　パッケージを読む

両者のパッケージの記述内容を比較するために、共通した内容をくくって一覧表を作成した。その各項目に従って、パッケージの実物を手にし、指先でその手触りを確かめながら両者の記述を読み比べる。これを学級ですりあわせる。個人の読みだけでは気づかなかった表現の効果が明らかになる。

①キャッチコピーを比べる

明治「おいしさは進化する」

森永「元気のヒミツはチョコ習慣」

「明治派」は言う。「短くて説得力がある。進化した味ってどんなのだろうと思って買いそう。消費者に刺激を与えている。数年後には今よりおいしくなるという感じがする」。しかし忠告も出る。「進化するより元々おいしいのだからその味を守った方がいい」。

「森永派」は言う。「本当にそんな気分になれる気がする。『ヒミツ』がいい感じだ。子どもには森永の方がわかりやすくていい。『元気』にひかれた。健康的でいい」反面こんな危惧も出される。「しかし、チョコが習慣になったら太る」。

②口上を比べる

明治「純粋な味わいを求めて原材料を選び、伝統のおいしさに磨きをかけた、永遠のピュア（純粋）チョコレートです」

森永「一九一八年　森永は日本で初めてミルクチョコレートをカカオビーンズから一貫製造しました　その伝統と独自の技術によりミルクのコクとカカオの芳醇な香りをひきだしたピュアチョコレートをお届けします」

【明治派】

○「永遠」がいい。ずっとピュアチョコレートを食べられるような気がする。

○両者ともに「伝統」を使っているが、「伝統のおいしさに磨きをかけた」表現がい

い。これは、キャッチコピー「おいしさは進化する」と響き合っている。
○森永よりも短いが、伝えたいことがしっかり入っている。
　しかし表現の矛盾を指摘する声が出る。
○「伝統のおいしさ」と「おいしさは進化する」、これってわけが分かりません。

【森永派】

○説明は少し長いけれど、伝統のチョコだということがよくわかり納得できる。
○最後の「お届けします」がいい。森永は言っている。「私たちがお届けする相手は『あなた』なんです」。
○「芳醇な」がいい。
「芳醇：酒の香りが高く、味にこくのある形容」（『新明解』）。あえて酒の味を形容することばをチョコレートに使って効果を上げている。

③「お早めに」か「早めに」か

森永「開封後はお早めにお召し上がりください」

明治「開封後は早めにお召し上がりください」

　多くは森永が丁寧でいいと言う。しかし明治が読みやすいという少数意見もある。「お召し上がりください」で敬意は十分に伝わる。「お早め」がいっそう丁寧な表現でいいと支持する生徒が多数である。しかしそれが煩わしいと感じる生徒もいる。敬語も過剰に使えばかえって相手に不快感を与えかねない。そのぎりぎりのあわいに森永の表現がある。

④「さしつかえ」か「さしさわり」か

森永「チョコレートは高温になると油脂分が溶け、冷えると白く固まることがあります。召し上がってもさしつかえありませんが、風味の点では劣ります」

明治「高温でやわらかくなったチョコレートは冷えて固まると白くなることがあります（ファットブルームといいます）。これはチョコレートの中の油脂分であり、召し上がっても身体にさしさわりはありませんが、風味は劣ります」

「必要なことだけを書き、最小限に文字数を絞った森永はよい」。
「細かく説明している明治がいい」「『ファットブルーム』という専門用語を示した明治が納得できる」。専門用語が素人に与える影響を明治はちゃんと見抜いているのか。しかし「別にこんな専門用語は知らなくてもいい」。それよりも説明はシンプルに、と考える生徒もいる。
「明治はちゃんと『身体に』と書いてあり、どこにさしさわりがないかが分かる」。この意見に対し、「しかし明治は『ほかにもまだあるかもしれない』というふうにも読めるよ。だから長々と書かないで、あっさり簡潔に書くのがいいんだ」との意見が出る。結局、生徒にはより身近な理解語彙である「さしつかえ」が多く支持された。しかし「身体」とのセットなら「さしさわり」の方がしっくりくるのは確かである。

⑤不都合なのは「製品」それとも「品質」

森永「万一製品に不都合がございましたら、お手数ですがご購入の月日・店名をご記入の上、現品と外包みをお客様相談室あてにお送りください。代品と郵送料をお送りいたします」

明治「万一品質に不都合がございましたら、現品をラベルごと左記宛にお送りください。代品と郵送料をお送りします」

　森永の「製品」の方がわかりやすい、

と生徒が言う。品質はチョコレートそのものに限定されるが、製品なら包装も含むそのもの全体と考えられる。森永の「お手数ですが」が丁寧でいい。また明治の「お送りします」に対する森永の「お送りいたします」。これもいい。やがて「森永は消費者に購入の月日と店名を書いてもらわなくてはいけない。それだけ余計な手数を、迷惑をかけた消費者にかけるのだから、このことばを添えるべきである」との認識にも到達するのである。

⑥相談するならどちら

森永「お客様相談室」

明治「お客様相談センター」

「センターがいい」多くの生徒が言う。辞書を引く。「センター：中心となる機関・施設・場所。多く他の語と複合して用いられる」「室：官庁・会社などの、組織上の一区分。普通、局・部・課という系列に属さない」（『大辞林』）中学生には「室」の機能はわかりかねる。彼らに身近な外来語「センター」の方が担当者も多く、苦情に対して即座に組織的に対応してくれそうに感じる。信頼度安心感ともに高いと感じられるのが「センター」である。和語と外来語の語感の違いが、ここで鮮やかに示された。

総合的な結果は、明治三十一、森永二十九、同等二十二。顕著な差は認められなかった。

【明治】

○パッケージがおしゃれ。キャッチコピーがそそる。高級感があり華やかさがある。さっぱりした書き方でいい。光っていてチョコレートがおいしそう。子どもが見てわかるチョコは明治である。字が明るい。手触りがつるつるしている。

○森永に比べ説明が丁寧さに欠ける。文字が目立ち買う気がわく。森永は構成のまとまりはあるが、表の中味など細かいところは明治がわかりやすい。

【森永】

○大人向けの感じ。暗くて苦そうなパッケージ。ぎらぎらじゃなくてちょっとおとなしい金の字で文字の色が見やすい。包装紙の色がおいしそうに見える。表紙が浮き出て肌触りがいい。伝統の味を伝えようとする意欲が伝わる。けれど必要ないと思うものもある。いろいろなことが詳しく書かれていて安心感を持てた。森永を買ってくれる客に対してはちゃんと考えている気がする。

6　おわりに

紙質、色合い、字体も含めてこれだけ丹念に包装紙を読むことなどめったにあるまい。敬語、語句・語彙、助詞、接頭辞に敏感に反応しながら生徒の言語感覚が磨かれてゆく。企業の購買者への配慮と同時に彼らの自負も伝わる。購買者の気持ちに届き、それを揺さぶり引き寄せる表現によって、商品を買ってもらう。この目的のためにことばが生きて闘っているさまを我々は見ることができた。

文学教育の再定義が我々にとっての差し迫った課題となり、その可能性が議論されている今、あえて、カノン（聖典）化されている教材（多くの文学教材及び古典）の対極にあるきわめて非文学的な文章を教材に、一人一人の読みの差異を照射し、重層的に読む授業を試みた。

〔こんどう　まこと〕長崎県佐世保市立愛宕中学校校長　授業改革をとおした教師の専門性の確立と誇りの回復が実践のテーマ。著書に『コンピューター綴り方教室』（太郎次郎社）など。

「調べて書く」授業
―考えよう、地球市民の一人として―

内海 まゆみ
目黒区立第八中学校

ここ十年の携帯電話、インターネットの普及はめざましい。それに比例するように対人関係が苦手なものも多くなっている。電子メールという顔の見えないメディアに振り回されるものも多くなっている。本音が言えない、自分の本音がなんなのか自分でもわからない、語ろうにも語彙がない、このような悩みを、今を生きる中学生は、多かれ少なかれもっているのではないかと思われる。

筆者が受けもつのも、そんな中学一年生であるが、素直に感動する心は健在である。

本単元に入る前に、「平和を築く」（『現代の国語3』三省堂）を読み、著者の荒巻裕先生の話を聞く機会を得た。自らが飢餓状態にありながらほかの子どもに食べ物を分け与える女の子の話に、自分にはできないと我が身を情けなく思い、自分たちの恵まれた今を思う。『トットちゃんとトットちゃんたち』（黒柳徹子・講談社）のぬいぐるみ爆弾に憤り、飢餓地獄の子らが不平も言わず大人たちを信じてバナナの葉の下で亡くなっていくというレポートに「これでいいのか」と訴える。その生徒たちを前に荒巻先生はおっしゃった。「私たちはみんな地球市民の一人です。」と。そのことばを生徒一人一人が実感するための教材として本単元を構想した。

1　単元の目標

今を生きる生徒一人一人が、

1　地球市民の一人として、今地球で起きている出来事について関心をもつ。
2　さまざまな種類の文章から必要な情報を集める。
3　情報収集の過程で課題を見つける。
4　課題についての材料を集め、自分の考えをまとめる。
5　自分の意見とその根拠となる情報とを効果的に構成してレポートを書く。
6　意見交換会を通じて自分の考えを深める。

2　授業の流れ

(1)授業者の作成した手引きにより「調べて書く」活動の概略をつかむ。→生徒が自分の関心にあわせて、それぞれの課題の候補を考える。→資料を選択し、カードに文中のキーワードとその場所などを記入しながら読み進める。

(2)情報収集の過程で課題を絞る。→新聞から関連記事を探す。→インターネットなどでも調べ、材料を集める。
(3)材料を整理し、取捨選択する。→自分の考えをまとめる。
(4)二学期に学習したレポートの書き方を復習する。→情報と意見とを効果的に構成し、レポートを書く。
(5)テーマに応じたグループをつくり、報告会を行う。→意見交換のあと、グループとして発表準備を行う。
(6)グループごとにテーマについての発表を行う。
(7)学習を振り返り、まとめの文章を書く。→自己評価を行う。→まとめの冊子をつくる。

3　単元のねらい

本単元は「書く」力だけでなく、「話す・聞く」「読む」力を伸ばすことを意図している。

まず「書く力」について。二学期はじめに教科書教材を題材にして、レポートを書く練習を行った。ここでは形式を学ぶことを主眼とした。国語に限らず生徒たちはいろいろな教科、総合的な学習の時間の調べ学習でレポートを作成する機会は多い。一回の練習だけでは応用が不十分だと考えて再度レポート作成を計画した。今回は内容の充実を目標とした。

次に「読む力」について。本校では朝読書が軌道に乗っている。読書の幅という点でも推薦図書の発表会などをとおして広がりがみられる。さらに読書の幅を広げ、今まで手にしなかった種類の書物との出合いによって心の豊かな、視野の広い人になってほしいと願い、この単元では、図書館から自然科学関係の本、写真集、絵本、社会分野の本などを選び出して自由に閲覧できるようにした。そして、メモをとりながら本を読むという情報収集力を身につけることも目標とした。

最後に「話す・聞く力」について。日本人はおしゃべりはするが意見は言わないといわれることもあるようだ。本校生徒も決して例外ではなく、自主的に意見を言えるものを少しでも増やすことが当面の目標である。最終的には社会人となった彼ら全員が、根拠に基づいて自分の意見をもてる、自分の意見が言える地球市民の一人になってほしいと願っている。

4　成果と今後の課題

今回目黒区立八雲中央図書館より八十余冊の本を一ヶ月にわたってお借りした。生徒たちが学校図書、授業者の資料から決めたテーマをお伝えして、図書館司書の方が選択してくださったものである。テーマに関連した本を自分で探す力を養いたい。

レポート作成については、本のある部分を丸写しするものも多いので、必要なところを抜き書きするという力も養いたい。

以上は昨年度二月の実践報告である。二年生になった彼らは、六月の移動教室事前学習の際には百三十冊ほどの本と向き合った。調べる力は確実についている。口頭発表のプレゼンテーションの工夫も今後の大きな課題としたい。

〔うつみ　まゆみ〕現在、東京都目黒区立第八中学校に勤務。「読書はこころを豊かにする」「知識は一生の財産」と生徒たちに訴える日々を送っている。

「批判的読み」によることばの学び

河野 順子　熊本大学

「批判」への抵抗・嫌悪感

大学の授業の一コマでのことである。小学生が説明的文章の学習をとおして、「批判的読み」を行っている授業風景のビデオを学生たちに見せ、このような「批判的」に検討し合う学習は必要かどうか、学生たちの見解を求めた。

すると、学生たちの意見はおおむね次のような二つに分かれた。

一つは、友達の意見や筆者の見方、考え方に対して、「ぼくは、～さんの意見には反対です。」「わたしは、～君とは異なる考え方をしていて」というふうに、反論するその声が怖いというものであった。では、なぜ怖いのかと尋ねると、その理由は次のようなものであった。「もしも私が批判される立場だと、そこにいること自体がいたたまれない思いになるし、次には発言なんかしたくなくなると思う。」「教育で大切なのは、相手の立場をわかってあげ、わかり合い、協力し合うことだと思う。だから、批判のような相手を傷つけるような学習は必要ない。」

ここには、批判される側の心情面の負担、そのことを配慮した思いやり、わかり合う授業の必要性を主張する方向性が見出せる。

そして、もう一つの意見は、わかり合う、協力し合うということと、批判することは決して対立する概念ではなく、批判をも受け、その中から本当に必要なことは何なのか、真実は何かを見出すことこそが大切な教育だとする立場である。表面的にわかり合ってもそれが人間と人間の関係を深めることにはならず、自分を成長させることにもならないと考えているのである。

また、こちら側の意見として述べた一人の学生は、批判なくして自分自身のアイデンティティは形成されないと主張した。

以上が「批判的読み」に対する学生の反応である。そして、割合からいうと、圧倒的に前者の方の意見が多かった。つまり、学生の側からすると、人を傷つけてしまう、ひいては、これまで自分の中で培ってきたものが否定されてしまうという不安から「批判的読み」に消極的な態度をとっていると見ることができる。

では、現場教師は、この「批判的読み」

をどのようにとらえているのであろうか。大学院の授業で、同じく「批判的読み」の授業風景をビデオで見たときのことである。現職で来られている先生の一人が、「批判するなんてとんでもない。相手ばかりを批判して何になるのか。そういうことでは自分のことばに責任をもたない言いっぱなしの生徒を育ててしまう。それに、その道の専門家である筆者がそれなりに考えてまとめた一つの文章をむやみに批判などすべきではない。」という意見を述べた。

「批判的読み」は、日本の国語科教育の歴史の中でも、学習者主体の学習を生み出そうとする実践家や実践団体の中から、明治、大正期から幾たびも提唱され、脈々と教育界の中に生き続けてきた。しかし、日本的な風土の中で、これまで主流になることはなかった。前述してきた学生や教師のことばからも「批判的読み」の抵抗感・嫌悪感は相当に根強いということがわかる。

「批判」への抵抗の原因

では、その嫌悪感の源は何であろうか？

一つは、先にも少し触れたが、わかり合える、協力し合う、もっというならば、一つ一つ説明しなくても暗黙のうちにわかり合えることが最良と考える日本的風土のあり方に起因していると考えられる。しかし、多様な価値観の中で揺れ動く今日、国際社会の中で、多様な人々と関係しながら生きていくことが求められる今日、本当にわかり合えるという事態は起こりうるのであろうか。例えば、関連性理論では、表層の意味は受け手によって多様に受け取られることが示されている(1)。こうした多様な人々の中の、多様な価値観の中で生きていくには、わからないことはわからないと尋ね、私はあなたの考えとは異なりこう考えるというふうに、自分の考えを理路整然と述べていく必要がある。

また、批判されることによって、これまでの既有のものが壊されるという感覚にはどう対応していけばよいであろうか。実は、このこと自体が私たち自身のことばの学びとして非常に大切なのではないかと考える。しかし、学生の意見にもあるように、私たちは自らがこれまでに学んできたこと、体験したこと、そのことを知らず知らずのうちに「自明なこと」と考える傾向にある。例えば、学校で学んできたことは唯一絶対的な価値をもっていて、それを保持し続けていくことが、自分らしく生きていくことだというような価値観である。

しかし、私たちが今現在生きている社会状況をみたとき、日進月歩の科学の進展や思潮の変化の中で、何が大切で、何が真実かは容易には判断できない。

「批判」の必要性

ヴィゴツキーは、私たちがことばを獲得するその過程を、外言と内言の二つの回路によって説明した。ヴィゴツキーのこの考えは、他者との豊かな、密接なかかわりが、実はことばの教育において大変重要であるということを改めて教えてくれる。

一方、現在、「社会的構成主義」など新たな学びの理論の潮流によって、他者との相互作用の中で学びが生成されるという「共同体による学び」が注目されている。そこでの学びが他者との本気のか

かわりを目指すならば、そこにはことばに真剣にかかわらざるを得ないような学びをとおして、自己の内に真にわたしのことばを育む場が実現する可能性が開かれる。そうした学びの場とは、次のような感情体験をもたらすと考えられる。それは、形だけの共同性ではなく、私とは異なる他者を眼前にしながら、つながりたいと思いながらも簡単には人とつながりえないという体験である。つまり、他者とのかかわりによって、自己の内部に葛藤がもたらされ、一時的にせよ自己信念の揺らぎや自信喪失や自己存在の否定感情が抱かれ、何とかしなければ自分の立場はないといった感情的経験である。こうした一見マイナスとみなされる感情的経験をくぐること、そのことが学習者の内に、自己内自己による対話を促し、真のわたしのことばを生み出す営みとなるのではないだろうか。

この自己内に葛藤を生み出す方法として、学習指導における「批判的読み」の可能性をあげることができる。

このことを、説明的文章の読みにおける「批判的読み」を問題にしながら考えてみたい。

説明的文章の学習指導における「批判的読み」が促すことばの学び

私は、説明的文章の学習指導をとおして、筆者のものの見方・考え方を知るとともに、自分なりの見方・考え方をもった自立した学習者の育成を目指したいと考えている。

こうしたとらえ方のもとでは、教材も一つの他者ととらえる。とすると、説明的文章教材の場合、筆者が、世界の中で何か揺り動かされるもの・こと、あるいは、説明しなければ、訴えなければならないことを見出し、それを自らの見方、考え方のもとに論理構築して完成されたものととらえることができる。

学び手は、この一人の筆者の世界のとらえ方に対して、では、自分はどうとらえるのかという問題意識のもと、教材の文章に出会ってみる。こうして、一人の筆者という人の世界のとらえ方をとおして、自分ならどうとらえ、考えるのかという学びが展開することとなる。

こうして説明的文章教材を用いた学習を考えてみると、「批判的読み」は必然の方法論として浮かび上がってくる。

こうした筆者との対話をとおして、学習者なりのものの見方・考え方、述べ方を形成する学習指導では、次のように学習は展開する。「筆者は、自分の考えを述べるために、こういう事例を出しているけれども、これでいいのか、私ならこういう事例の方がわかりやすい。」「筆者の論理には飛躍が見られる。これではわかりにくいのではないか。私は納得いかない。」このように学習者は教材を媒介としながら、筆者と対話し、筆者のものの見方、考え方に対して自分なりのものの見方・考え方や述べ方を形成していくのである。このとき、学習者の既有のものの見方・考え方に変更を迫り、見直しを迫るために必要なのが、教室という学びの空間を共にしている学習者どうしや教師という他者の存在である。

一人の学習者は、筆者の論理の展開のあり方についてなるほどと納得していても、他者の発言を聞くことにより、「私のとらえ方はこれでよかったのだろうか。」「なるほどそういうとらえ方のほう

がわかりやすいかもしれない。」と自らの考えを揺さぶられることになる。そして、自らがよしと思い主張していることに、他の学習者が反論を加えてくるならば、学習者は内なる葛藤を抱え、そのことが自己内自己の声を生み出し、自己内対話を始めることになる。学習者のうちに、何か新しいものが芽生えたり、わかったと思える瞬間が芽生えるのは、実は、こうした他者との間で、葛藤が生じるからである。このように、他者からの批判を受け、内部に葛藤が生じるからこそ、学習者は真剣に自らの既有の知識や見方・考え方への見直しを迫られることとなる。

つまり、葛藤があって私たちは、初めて既有のものを見直し、新たな知識を再構成することができるようになるといえるのである。

目指すべき ことばの学びとは

このように考えてみると、批判的読みというのは、他者へ向けての批判をとおして、実は、自己の既有の知識や見方、考え方への変更を迫るものとしてとらえる必要があることがわかる。

現在、国語科におけるメディアリテラシー教育の流行のもとに、改めて「批判的読み」が注目されている。

菅谷明子氏によれば、メディアリテラシーにおける「批判的」（クリティカル）な思考とは、「適切な基準や根拠に基づく、論理的で偏りのない思考」という意味である（2）。菅谷氏の指摘からは、日本的なネガティブな意味合いではなく、前向きな思考を見て取ることができる。しかし、「適切な基準や根拠」とは何か、その指標をどこに置くのかは必ずしも明らかではない。

また、ことばの教育を行う国語科教育界において、批判的読みは、何に向かって、どのように行われるべきなのかという点についても先行の実践研究の立場は多様であり、共通の基準や前提があるわけではない。

こうした現状の中で、筆者は、外部へ向けて批判を行うことが、実は、自分の内部の既有知識、既有の価値観を揺さぶり、自らのアイデンティティーに揺らぎをもたらし、新たな自己を構築しうるような批判であることが重要であるととらえる。そうでなければ、単なる批判のための批判になってしまい、学習者個々の真のことばの教育にはならないであろうと考えるのである。

（注）

（1）関連性理論では、コミュニケーションのありように、コード解釈モデルと推論解釈モデルの二種類があると主張する。そして、この二つのモデルは実際のコミュニケーションにおいて、次のように機能することを、スペルベル・ウィルソン（『関連性理論―伝達と認知―』内田聖二、一九九三）は述べている。文には、表層の意味（意味表示）がある。しかし、「文の意味表示と発話によって実際に伝達される思考との間には隔たりがある」（九頁）。つまり、実際の発話（文章）の表層の意味と、送り手の意図との間には、普通ずれがある。そこで、「この隔たりは…中略…推論によって埋められる」（九頁）。結局、「（言語伝達では）言語的コード化とコード解釈が関係するが、発話された文の言語的意味は、話し手が意味する内容を充わにコード化できない。話し手が意味する内容を聞き手が推論するのを単に助けているにすぎない」（三二頁）。

（2）菅谷明子（二〇〇〇）『メディア・リテラシー―世界の現場から―』岩波新書

〔かわの　じゅんこ〕熊本大学教育学部助教授。読みの学習指導を中心に「学びの共同体」による授業論の開発を手がけている。著書に『対話による説明的文章セット教材の学習指導』『学びを紡ぐ共同体としての国語教室づくり』（明治図書）他がある。

キーワードで読む国語教育

＊情報教育
＊調べ学習
＊指導の工夫

尾木 和英　東京女子体育大学

情報教育

情報活用能力とは何か

国語科の授業で、インターネットによる情報収集、調べた事柄や自分の考えをパソコンで文書にする学習活動などが見られるようになった。本誌第六号では、パソコンの辞書を用いての漢字学習が実践アイディアとして紹介されていた。

情報手段を活用しての創意を生かした学習活動、情報活用の実践力育成への取り組みが重要であることは論じるまでもない。問題になるのは、その活動でねらいとするのが何であるか、必ずしも明確になっていない場合である。

不明確になることの一つの理由に、情報活用能力そのものが多岐にわたることがあげられる。もう一つの理由は、国語科に求められる学習活動が、これまた多様ということがある。

文部科学省が平成十四年に作成した「情報教育の実践と学校の情報化」では、国語科における情報活用能力育成の学習活動として、①必要な情報を収集し、適切に利用する学習活動、②情報を取捨選択したり、その内容を要約したりする学習活動、③必要な参考資料を、情報通信ネットワークや学校図書館の利用によって収集、活用する学習活動、④情報通信ネットワークを利用した対話、討論、発表などの「話すこと・聞くこと」の学習活動など八つの事項が示されている。これからの指導においては、こうした資料によって取り組みを整理し、その活動でどのような力を付けようとするのか、ねらいを焦点化する必要がある。

調べ学習

インターネットをどう活用するか

最近目にすることの多くなった、インターネットを活用しての調べ学習についても、疑問を抱かせる場合がある。

まず、「調べ学習」そのものに疑問が提出されている。佐伯胖『新・コンピュータと教育』（岩波新書）では、調べ学習の多くの場合、子どもたちに「仮説」もないし「検証」もないことが指摘されている。「自分なりの疑問も発見もない。対立する意見の交換も議論もない。」と述べられている。ただ断片的な知識の収

集に学習がとどまり、加えて、インターネット利用ということになると、「ともかくデータを集めたら、こういう結果になった」という調べ学習のオンパレードになるというのである。

ここにある指摘は重要である。調べ学習を導入するとしたら、学習者の主体的な課題意識、活動の過程での話し合いが重視されるべきである。学習活動をとおして、課題解決の力を育てることに意味があるからである。インターネットの活用は、その学習活動を効果的に行うために位置づけられなくてはならない。

指導の工夫

求められるねらいの焦点化

東京法令『月刊国語教育　二〇〇四年十月号』は「焦点を絞った読むことの指導」を特集している。そこにある、情報活用能力育成を中心のねらいとする岩間和子氏（横浜市立小田中学校）の実践提案には、共感を抱かせるものがある。

そこでは、複数の学習材を活用した活動が展開されるのだが、その活動でどのような力の育成がねらいとされているのかが明確なのである。文中に「目的やねらいがあいまいなままに読んでいるだけでは、その文章を読む価値は半減してしまう」「『読むこと』の学習の中に位置づけられるパネルディスカッションでの主張や発言は、あくまでも内容に注目し、『読むこと』の目標や指導事項に即した評価項目と観点を設定する必要がある」とあるように、常にねらいの焦点化が意識されている。

授業時数はきわめて厳しい状況にある。だからといって、語彙を豊かにするための指導の手を抜くわけにはいかない。発表、討論の活動も体験させてやりたい。ところが、この、あれもこれもの中に落とし穴がある。意欲的にあれもこれも取り組んだ結果が、何もかもが不十分になる、という危険がある。そこで重要になるのがねらいの焦点化なのである。指導の工夫とねらいを結びつけて本欄に取り上げた理由がここにある。

〔おぎ　かずあき〕東京女子体育大学理事・言語教育文化研究所代表理事。創意を生かした指導法開発の事例収集・分析を進めている。近著に『教員研修の実際』（ぎょうせい）がある。

いま、小学校では

伝え合おう こころをことばにのせて

鈴木 優子
横浜市立荏田西小学校

小さなことばの行き違いが、大きなこころの溝をつくることもある。子どもたちを見ていて感じることである。ことばの力を育てることはこころを育てることではないか。今こそ、この観点が大切だと感じている。

ことば育ては日常にあり

「それ、なになに？　どういう意味？」

一年生のこどもたちは、なんにでも興味をもち、知りたがる。どの子どもも、もっと知りたい、もっとできるようになりたいと思い、小学校へ入学してきている。「なんでも知りたいこころ」は、学びへの大きなエネルギーになる。友達の発したことばにすぐ「それ、なあに？」と声がかかり、発したことばの意味を考え合う。ここで「ことばの学び」が始まる。

谷川俊太郎の「うんとこしょ」の詩の学習中のことである。第四連「歌が心をもち上げる」のところで、「こころってなあに？」と声が上がると、すかさず「ここ！」と、胸のあたりを指して返事が返ってきた。「よくわからない」と困った声が上がった。そこで、「歌うときみんなはどんな気持ちになる？」と教師が問いかけると、「いい気持ち、うれしい、楽しい、元気になる」と、次々とにぎやかな声。「このぜぇんぶをこころって言うの」と伝えると、「あ～（にこ！）」と得心した様子である。疑問をもったそのときその場ですぐ学ぶことが、ことばを育てる大きな力になるのだ。

ことばを紡いで こころを育てる

休み時間が終わったところで、二人の子どもが泣いている。「ぼくは何もしていないのに」と互いに譲らない。よくよく話を聞いていくと、ちょっとした行き違いのようだ。お互いのことばが足りないことで、意思が思うように伝わらず、言い合いになってしまったのだ。ことばの力が十分でない一年生にとって、自分の思いを伝えたり、相手の思いを推し量ったりすることは、難しいことである。

そこで、ことばを補うことでそれぞれの思いを明確にしてやりながら、二人のこころを紡いでいった。どこで、なぜ行き違いができたのか気付かせながら、「それはこう言うと伝わるよ」、「その言い方では伝わらないよ」などと、「何を、どのように」話せば伝わるのか、ことばの使い方を具体的に指導した。子どもが自分のことばで伝え合い、心を通わせていけるようにすることが、ことばの力を育てることになると考えたからである。これまでは、子どもの話を聞きながら、わた

しが話し手になり、双方を仲直りさせることだけに終始していた。これでは、ことばの力も相手の気持ちを思いやるこころも育たない。伝えたいことをどう言えば伝わるのか。子どもにとってことばを学ぶとはどういうことなのかを考え続けている。

■ ことばの学びは教科を越えて

子どものことばの学びは、国語科の学習だけでなく、生活丸ごとに存在すると考えていながら、国語科の学習では、ことばの学びを意識しても、ともするとそれ以外の場面では、あまり意識することなく過ぎてきているように思う。

ことばの力は、国語科の学習での学びと、他教科や生活等の場面との双方がかかわり合って育っていくと考えている。学んだことばの力は、あらゆる場面で生きてはたらくことが重要だと思うからだ。

ここで考えておきたいのは、「ことばの学びはどこにあるか?」ということである。「教室で机に向かい、教科書を広げ、教師の質問に手を挙げて答える」、これが学校での学びと考えられてきたように、ことばの学びもとらえられていないだろうか。ことばの力を育てる学びは、運動すること、音楽活動や造形活動を楽しむこと、自然に触れることや友達と遊ぶこと、身のまわりの人とあいさつを交わすこと、給食や掃除当番活動をすることなど、あらゆる場面に存在する。

給食運搬時、二人一組で運ぶものを持って並んでいる。「ペアはいますか?」「はい!」「行ってもいいですか?」「いいですよ」。一番前の子どもが声をかけ、ほかの当番がそれに応える。この場面では、何をどのように言えばうまく伝わるかを考え、子どもたちと話し合って、掛け合うことばを決めたのである。

このように、実生活の場は、「どこで、どのことばを、どのように使うのか?」を学ぶことができるすばらしいことばの学びの場だといえないだろうか?

■ 使いたいことば言語感覚を磨く

「すごいねって言われたの。うれしい」。リレーの選手に選ばれた子どもが友達に言われてうれしかったことをハートのカードに書いている。できるようになったことなど自分や友達のよいところを見つけて、カードに書きためていくものである。「すごい、楽しい、うれしい、明るい、やさしい、いいね」など、言われたり書かれたりしてうれしいことばを集め、意識して使っている。自分がされてうれしいことは、友達にもしよう。この取り組みは「思いやり」にもつながる。

ことばを選んで使うことの大切さは、こころを育てる。自分が発することばで自分も友達もいい気持ちになれる。

わたしは、音楽科での鑑賞学習をとおして、子どもたちの感じるこころを育てる研究に取り組んでいる。美しい音とは、ことばとは、だれもがここちよいと感じる音楽であり、伝え方だと思う。今日も子どもたちの「それなあに?」が聞こえてくる。自然な学びの場面を鋭くとらえ、子どもたちのことばの力を育てていきたい。

〔すずき　ゆうこ〕横浜市立荏田西小学校教諭。音楽鑑賞学習の研究や日本感性教育学会での学びをとおして、子どもの感性を磨く授業の実践を行っている。

教師のための読書案内

ＩＬＥＣ言語教育文化研究所

タイトルにある「教師のため」は、一つは指導改善の意味です。ほかの一つはそんな硬いことは抜きにして、とにかく楽しい、広く教師の教養として役立つということ。本欄ではその両面をあわせもった図書をご紹介します。

『単語の文化的意味』森住衛

三省堂　2,100 円　2004 年

英単語を内容としますが、国語の先生方にもお薦めします。とにかく楽しい。ちょっとした空き時間、電車の中、どこででもページを広げたくなる。知的好奇心を刺激するのです。

英語の単語が背負っている文化や歴史に触れることができ、言葉とは何かを考えさせてくれる、そこに本書の魅力があります。

『学ぶ力』河合隼雄ほか

岩波書店　1,680 円　2004 年

学び続けることの意味と秘訣に関して、それぞれの学びの現場でユニークな活動を続けてきた５人による本です。「深く問い、語り合った」という表現が、この本の成果と魅力を的確に伝えています。

『日本語力と英語力』齋藤孝・斎藤兆史

中公新書ラクレ　756 円　2004 年

本書は、教育学、身体論を専門とし、話題になった『声に出して読みたい日本語』という著書のある齋藤孝氏と、英語・英米文学を専門とし著書に『英語達人列伝』などのある斎藤兆史氏との対談の記録です。文中にある、「英語を訳す訓練によって鍛えられる日本語力、論理能力がなかったら、最終的に本当に英語を役立たせることはできません」といった部分にはっとさせられる読者も多いことと思います。

『読むことの力』ロバート キャンベル編

講談社選書メチエ　1,890 円　2004 年

テーマも講師もそのつど入れ替わる東大駒場の連続講義の記録です。それぞれの先生が専門を生かしつつ、魅力的な講座を目指したものですから、おもしろくないわけがありません。視野が広がることは間違いありません。読み終えたとき、「読み」について今までと違った所から考えるようになるものと思います。

『清水義範の作文教室』清水義範

ハヤカワ文庫　567 円　1999 年

作文の授業に関するカリキュラム開発の実際が学べる本です。と言っても、筆者はあの清水義範氏です。頭が痛くなるような難しいことを詰め込むわけがありません。読んで楽しくないわけがありません。それでいて、指導の要諦を教えられるお薦めの１冊です。

『文化記号論』池上嘉彦ほか

講談社学術文庫　1,008 円　1994 年

少々読み応えがありますが、言葉の学びを構想する際の基礎的な力を与えてくれる本です。記号としての言葉の働きを明解に理解させてくれるのです。この本を読むことが、読解や作文の授業と取り組む際に、きっと役に立つと思います。

『美しい夏の行方』辻邦生

中公文庫　760 円　1999 年

イタリア、シチリアの旅を内容とするエッセイ集なのですが、とにかく文章がすばらしい。完成度の高い文章、これに写真がそっと寄り添っていて、しばし現実の時間を忘れさせてくれるのです。文章表現において、叙述、描写と感情移入がどのようになされると効果を発揮するか、その秘訣に触れることも、魅力の一つです。

国語教育の『名著』再読

西尾実

『言語教育と文学教育』を読む

長谷川 孝士
兵庫教育大学

一九五〇年、一月二十五日発行の『言語教育と文学教育』の「はじめに」は、次のことばで始まる。

「いま、われわれの国語教育に課せられている根本課題は、言語教育の確立である。明治初年にはじまった語学教育でもない、また、大正初年におこった文学教育でもない、真の言語教育を行うことである。いいかえると、われわれのあるがままの言語生活を把握して、あるべき言語生活へ前進させるための学習を、適切有効に指導することである。」

国語教育の根本課題は「真の言語教育を行うこと」、言いかえれば「あるがままの言語生活を把握して、あるべき言語生活へ前進させるための学習を、適切有効に指導すること」というのである。

「いままでの国語教育は、文学教育であった。すくなくも、文学教育でありすぎた。それを、われわれの日常における、話し・聞き・書き・読む言語生活教育にするためには、計画をあらため、方法を一新しなくてはならぬ。」

と述べ、「そのためには、これまでの文学教育から、これからの言語教育への転換が必要である。」として、次の三点があげられている。

○これまでの文学教育とちがった言語教育の領域をうち建てること。

○これまでの文学教育とはちがった文学教育を見出すこと。

○その言語教育と文学教育とを、どう関連させるかを工夫すること。

西尾実『言語教育と文学教育』
（武蔵野書院刊、1950年1月）

西尾実先生は、「わたくしは、いま、（中略）小学校・中学校・高等学校などにおける国語教育の直接担当者ではない。教育実践においては、間接的協力者ともいうべき位置にある。したがって、この課題解決についての実践的報告をすることはできない。」と言い、しかし本書に収めた論文は「かつての実践者として、いまは、その協力者として課題解決の根拠をさぐり、その方向を見究めようとしている考察である。」と述べておられる。

この「はじめに」のことばは「一九四九年十月三十一日」の日付けで結ばれている。

戦後二年めの一九四七年十二月に「学習指導要領」試案が出て、翌四八年からの新制の中学校・高等学校の「学習指導要領」作成の委員会が設けられた。西尾先生が委員長に選ばれたが、四九年一月に国立国語研究所長に任命されたため委員長を退かれた。そして、一年後の五〇年一月に「国語教育実践の間接的協力者」

の立場で考察された本書『言語教育と文学教育』が武蔵野書院から出版されたのである。

西尾先生は、四七年三月に岩波書店から『言葉とその文化』を出版されている。『言語教育と文学教育』の「あとがき」で、この『言葉とその文化』につづいて『言葉とその教育』を書きたいと思って、「いま、その準備中である。本書（『言語教育と文学教育』）に収めた諸篇は、『言葉とその教育』への道程である。いわば、さぐり足であり、あるいは、足だまりである。」と書かれている。「いま、その準備中である」という『言葉とその教育』は、五一年一月に筑摩書房から『国語教育学の構想』の書名で発行された。

『言語教育と文学教育』の目次は、次のとおり。

はじめに
一　言語生活指導の基本問題
二　談話生活の問題とその指導
三　読書生活の問題とその指導
四　作文指導とその指導
五　文学活動とその指導
六　これからの国語教育の出発点
七　生活技術としてのことば
八　言語教育における文学機能
九　国語教科書変遷私観
十　国語教育革新の問題
おわりに

この「おわりに」の冒頭に、「この書に収めた諸篇は、わたくしが戦後に書いた国語教育関係論文の、ほとんどすべてである。」と書かれている（注　四七年―一編、四八年―二編、四九年―七編）。さらに「わたくしが、いま到達し得ている、国語教育における一般的な諸問題についての考察として」一から五までの「五篇を中心として最初に置き、つぎにはこれを根拠づけるような特殊問題の考察ともいうべき」六～九の「四篇を置き、さらに戦後における一般的な問題考察を試みた十を附載することとした。」と述べられている。

国語教育の「名著」としては、本書の翌年（五一年）一月発行の『国語教育学の構想』をとりあげるのが、より適切かと思われるが、あえてこの『言語教育と文学教育』を選んだのは、次のような個人的理由による。

国語教育実践研究個人史の出発点において、本書を読み、「言語生活」と国語教育、国語教育における言語教育と文学教育のあり方などについての問題意識と実践的意欲を大いに喚起されて「教室の人」（注　西尾実先生のことば）として出発したのである。五〇年の二月から本書を読みはじめ、三月に大学を卒業、四月から大学教育学部附属高校・中学校で、本書にはげまされて国語教育実践に取り組むことになった。

しかし、このような事情をぬきにしても、「言語生活」の視点をもって国語教育のありようをとらえた本書は、十分現代に通ずる意義をもつものである。

〔はせがわ　たかし〕　兵庫教育大学名誉教授。著書に『豊かな国語教室―原理・方法の探究』（右文書院）、『ひびきあう国語教室の創造』（三省堂）、『正岡子規　人とその表現』（三省堂）、『子規全集』八・一二・一七巻（講談社）などがある。

本の紹介

五明紀春
『〈食〉の記号学
―ヒトは「言葉」で食べる―』
大修館書店
1996・5刊

糸井 通浩

戦後の十年ぐらいが幼少年期であった私などは、〈食〉に対して異様に関心が高いといえるかも知れない。なくても我慢できるが、あると我慢できない。すべて食べてしまう。食を選択するという余裕がない時代を過ごしているからであろう。

しかし今は、飽食の時代といわれ、好みを選り分けて食べる。食が選択できる時代になって、かえって偏食が日常化していないか。バイキングや大学食堂などで、多種多様な料理に目移りしながら、今日は何を食べようかと思って選び取る食品が、意外にいつも同じ種類のものになっているのに気づく。個人レベルにおいて〈食〉が文体化しているのである。

筆者は、〈食〉という「物の世界」を食文化として言語とのアナロジーでとらえて、〈食〉という記号体系を異化してみせてくれる。それがおもしろい。知的におもしろいのである。

筆者の五明氏は栄養学者。「もはや私たちが食べているのは、個々の〈食べ物〉ではなく、それぞれに託された〈意味〉なのではないか」という。〈意味〉、つまり私たちは、「言葉」で食べているというのである。本書は、体に取り込む「食」を言語記号に見立てて、食する行為を記号論的に論じたユニークな本である。食文化を形成しているさまざまな側面が記号論によって意味づけされていて、やり過ごしてきたことが私たちの内面で異化され、新鮮な問題意識を掘り起こしてくれるのである。

二十八の話題が、「オードブル」「メイン・ディッシュ」「デザート」の三章に整理されている。これはという「話題」のタイトルを紹介してみよう。「食品の分類―食文化はエコノミーである」「等価交換―草が牛になる」「非線形思考―「クスリ」と「食物」の足し算」「食物添加物―食物観と国家観は地つづきである」「コミュニケーション理論―「食べる私」と「食べさせる私」」「食品の修辞学―食品開発は歌謡曲の作詞である」などなど。

中に「猩々緋の鎧―コピー食品はこうして生まれる」という話題がある。「猩々緋の鎧」とは、言うまでもなく菊池寛の短編小説「形」に登場する、それである。「コピー食品」とは例えば、カニ風味のかまぼこなどのこと。「カニ」という食品名はあの「猩々緋の鎧」に相当すると捉える。「カニ風味のかまぼこ」（鱈のすり身に色づけしたもの）が堂々とコピー食品であることを隠さずに店頭に並べられていても、つまり偽物であっても、食品として売れるのは、「カニ」というブランドが「猩々緋の鎧」だからだと説明している。「表面の形式が実質を圧倒してしまうのである」と。

〔いとい みちひろ〕龍谷大学教授。
文法・文章・談話を研究。

教室ですぐに使える《「50のアイディア」シリーズ》

最新刊

気軽に楽しく短い時間で

力のつく
古典入門学習 50のアイディア

教育文化研究会 編
A5　224ページ
2,310円（税込）

楽しみながら古典に親しむための学習アイディア 50編を収録。ただ名文にふれるというだけでなく、さまざまな角度から古典の世界にアプローチできる学習活動例を満載。古典に関するコラムも充実。

目次

1 冒頭を覚える
・かぐや姫の誕生
・縦軸と横軸で暗唱する
ほか

2 とびらを開く
・古文の読みに慣れる
・名詩・迷訳　ほか

3 響きを楽しむ
・名歌群読
・あなたも噺家に　ほか

4 名文を読む
・クイズ作りで楽しもう
・詩歌の源流に挑戦！
ほか

5 ことばで表す
・昔の人に手紙を書く
・古歌をヒントに物語を書く
ほか

6 文化に親しむ
・十二支を見つけよう
・何ですか、変体仮名って
ほか

7 漢文の世界を行く
・チンプン漢文
・意訳で近づく漢詩の世界
ほか

好評既刊

気軽に楽しく短い時間で
力のつく作文学習50のアイディア

気軽に楽しく短い時間で
力のつく音声言語学習50のアイディア

気軽に楽しく短い時間で
力のつくことばの学習50のアイディア

教育文化研究会 編
各2,100円（税込）

今すぐ使える学習活動のアイディアがぎっしり詰まった大好評ロングセラー！解説・資料も充実。

編集後記

●子どもの学校のＰＴＡ活動をとおして、父親がもっと学校へ行ったり、地域の活動に参加すべきだと強く感じるようになりました。いま、同じように考える父親たちが、各地でおやじの会をつくって、さまざまな活動を繰り広げているようです。

筆者も仲間といっしょに会を立ち上げ、活動を続けていますが、どうもおやじどうしで集まる夜の会ばかりが多いようです。はじめは、このことが少し不満だったのですが、最近、この会を通じて地域の人との輪が広がっていることを実感し、子どもたちを見まもる大人のネットワークづくりこそが大事なのだと思うようになりました。

●「国語教育の『名著』再読」は、今号より、長谷川孝士先生にご執筆いただきます。

（太郎）

三省堂 国語教育
ことばの学び 第7号

二〇〇五年一月二〇日発行
定価　一〇〇円（本体九六円）
編集・発行人　八幡　統厚
三省堂

〔発行所〕株式会社
〒一〇一―八三七一
東京都千代田区三崎町二―二二―一四
ＴＥＬ　〇三（三二三〇）九四二七〔編集〕
振替　東京　〇〇一六〇―五―五四三〇〇

〔印刷所〕泰成印刷株式会社
東京都墨田区両国三―一―一二

指導用教材

ピクチャーカード

A2判　100枚　定価　16、800円(税込)

■学習材のイメージをひろげる写真や絵を、カラー（一部モノクロ）で豊富に用意しました。

学習材ビデオ　①〜⑥

各巻とも解説書・学習指導案付き（続刊予定あり）

①②③④　定価　18、900円(税込)

⑤⑥　定価　21、000円(税込)

■観賞だけではなく、授業での活用を考えた、オリジナルビデオソフトです。

①「自分を表現する——スピーチとインタビュー」　20分

②「古文入門——言語編」　20分

③「この小さな地球の上で」　40分

④「平家のほろび——壇の浦の合戦」　40分

⑤「おくのほそ道」　40分

⑥「敦盛の最期——平家物語より」　20分

学習指導書

朗読CD／テープ　1・2・3

各学年　CD4枚または、テープ4本　解説書付

CD／テープとも各学年　定価　21、000円(税込)

■教科書の「本編」と「資料編」のすべての「読むこと」学習材が、正確かつ多彩な朗読で録音されています。

教室のことばの学びをサポートします。

生徒用教材

ワークブック　1・2・3

各学年　B5判　112＋20ページ　定価580円(税込)

■教科書の全学習材を取りあげ、授業の展開に即して基礎・基本を学ぶ「必携学習ノート」です。

表現ワーク　1・2・3

各学年　B5判　80＋8ページ　定価　420円(税込)

■教科書の「話すこと・聞くこと」「書くこと」領域のすべての学習材を取りあげるとともに、付録としてさまざまな言語活動のレッスンを収録しました。

漢字・語句学習ノート　1・2・3

各学年　B5判　104〜96＋8ページ　定価　420円(税込)

■新出漢字、新出音訓の完全マスターと語彙力をつけることを目指したドリル形式の学習ノートです。

文法学習ノート　全1冊

B5判　96＋16ページ　定価　480円(税込)

■1年から3年までの、文法の窓・「文法のまとめ」の学習に沿って活用できる、文法ワークブックです。

実力アップ問題集　完全準拠版　1・2・3

各学年　B5判　112＋16ページ　定価　924円(税込)

■基礎から応用まで、確実に国語の学力を身につけるための、教科書完全準拠版総合問題集。全問題見開きの構成です。

教科書ガイド　1・2・3

各学年　B5判　192ページ　定価　1、890円(税込)

■学習材のねらいや学習のポイントがよくわかり、効果的な予習ができます。

ステップ式　常用漢字ドリル

B5判横　96ページ　定価　420円(税込)

■すべての常用漢字を、覚え、使うことによって確実に習得していくことのできる積み上げ式のドリルです。

三省堂
〒101-8371 東京都千代田区三崎町 2-22-14 TEL.03-3230-9411（編集） 9412（販売）
http://www.sanseido-publ.co.jp

※表示の価格は税込の価格です。

SNPウェブサイト「ことばと学びの宇宙」リニューアル

http://tb.sanseido.co.jp/kokugo/

テキストから
プログラムへ

開かれた「ことばの学び」のポータルサイトをめざして

三省堂　国語教科書ホームページ　「ことばと学びの宇宙」は2004年8月，小・中・高の一貫した「ことばの学び」の総合サイトとしてリニューアルいたしました。従来までのコンテンツをさらに拡充・発展させ，さまざまな提案・対話・交流を続けてまいります。今後とも，よろしくお願いいたします。

1. **小学校 中学校 高等学校の国語科をつなぎ，総合的にサポートします。**
2. **教育情報発信センターとしての機能を，いっそう強めていきます。**
3. **マルチメディア・ラーニング・センターとしての機能を開発していきます。**

小学校教育関連リンク集

学習指導計画作成のために（中学国語）

『高等学校 古典』の紹介（高校国語）

ことばの季節

中学生にすすめたい100冊の本

研究会情報 ― 情報ＢＯＸ